

東京都立高等学校副校長研究協議会

研究協議会報告

第 24 号 (平成20年度)

東京都立高等学校副校長会
東京都公立高等学校定通副校長会

研究協議会報告第24号の発刊にあたって

東京都立高等学校副校長会長代行

玉井 篤（竹台・全）

平成20年度の副校長研究協議会は、去る8月28日（木）に東京都教職員研修センター（水道橋）にて行われました。今年度は研究体制が学校経営支援センターのチーム毎移行して3年目となります。

本年度の全体会では教育庁指導部部長高野敬三先生のご挨拶と、落語家六代目春風亭柳朝師匠による「話術を通したコミュニケーション」をテーマとしたご講話をいただきました。高野部長からは、「東京都教育ビジョン(第2次)を参考にして学校経営計画を立案していただきたい」、さらに「副校長の元氣が出る方法について提言してほしい」との励ましの言葉をいただきました。一方、春風亭柳朝師匠はさすがに話術のプロであると感じさせられました。しかしながら、コミュニケーションを図るためにはその根本となる深い教養がさらに必要であると実感しました。ご多用中出席いただきました両先生に紙面をお借りして感謝申し上げます。

本誌『研究協議会報告』は、当日の来賓のご挨拶やご講話を集録する唯一の刊行物です。私たち副校長は、校長とともに都立高校改革を担う責務と研鑽・研修による資質能力の向上を期さなければなりません。研究・研修や研究協議は、組織として課題対応力を構築する場であります。各分科会での指導・助言とともに活用されますことを期待する次第です。

最後になりましたが副校長研究協議会の開催にご尽力をいただきました教育庁指導部高等学校教育指導課、東京都教職員研修センター、全体会の会場を提供していただいた東京都立工芸高等学校、指導助言を賜りました東京都公立高等学校長協会に感謝申し上げます。また、管理運営、高校教育、生徒指導の各部門で研究を進めてこられた各地区副校長会の先生方に敬意を表するとともに、本誌編集に当たりご尽力いただいた事務局の先生方に感謝を申し上げます。

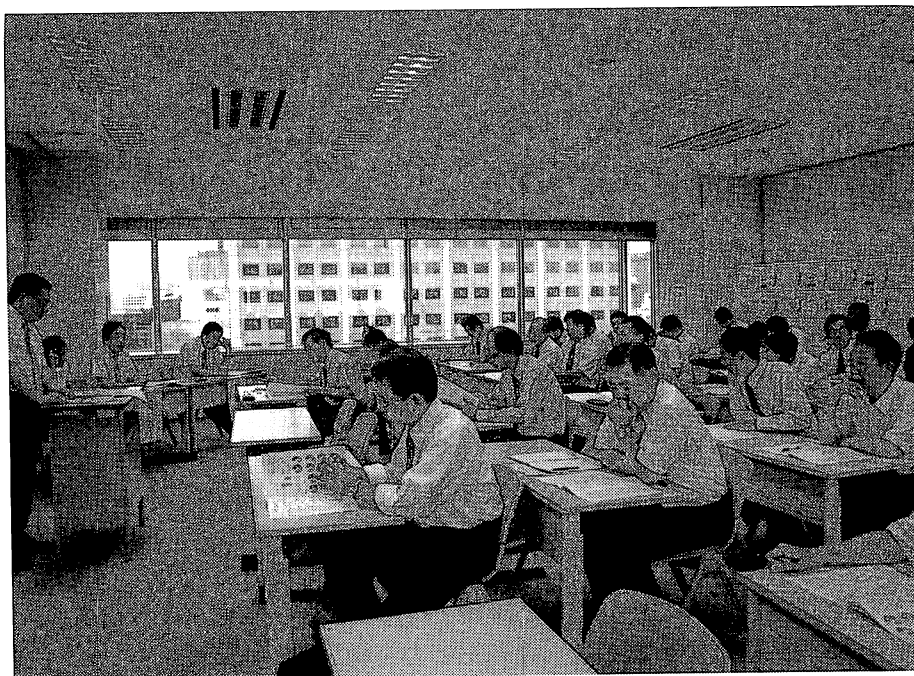
東京都公立高等学校定時制通信制副校長会会長

堀江 徹（第四商業・定）

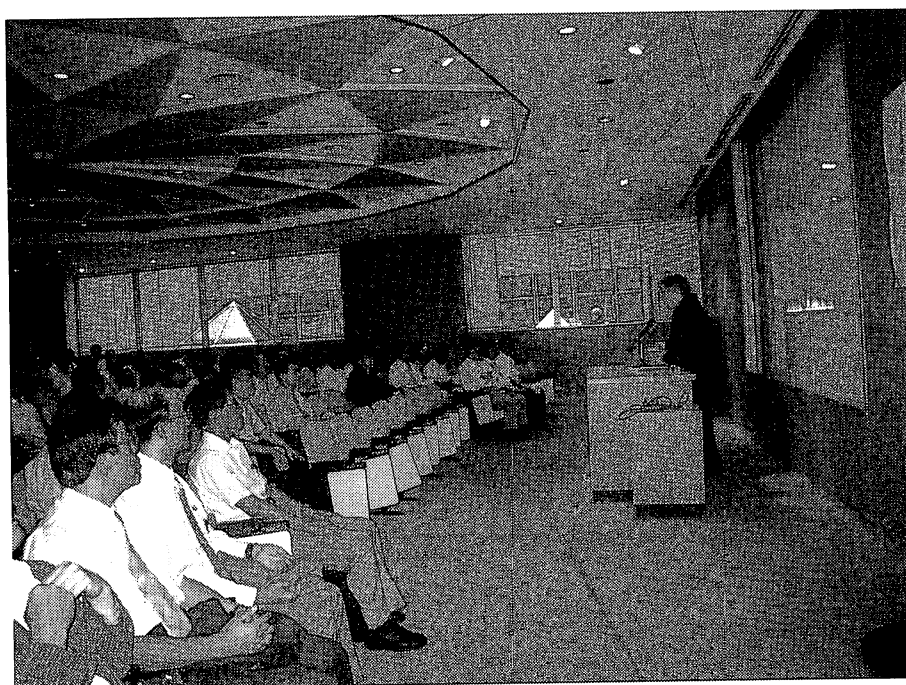
平成20年度の副校長研究協議会報告の発刊に際し、定通副校長会会長として一言ご挨拶を申し上げます。

今年は昨年より若干参加の人数が減ったようですが、定時制の分科会では教室に入りきれないほどで、熱気の中で協議が行われました。副校長の業務の多さと多忙感が言われて久しく、なかなか研究に目がいかない現実があるかと思います。しかし、副校長が自ら課題意識を持ち、自主的に研修を行うことが孤立に陥らず、自信を持って職を行う支えになるはずです。そして、このように研究協議の場で、互いの研究を共有することが我々に連帯感を与えてくれます。是非これからもがんばりましょう。

最後にご多忙の中を副校長の研究に対してご指導下さいました指導部高等学校教育指導課の先生方、ご講評をいただきました校長先生方、大変楽しいご講演をお聞かせ下さいました春風亭柳朝師匠、いろいろお骨折りいただいた事務局の先生方に厚く御礼申し上げてご挨拶とさせていただきます。



分 科 会



全 体 会

目 次

第24号の発刊にあたって	東京都立高等学校副校長会長代行 玉井 篤 東京都公立高等学校定通副校長会長 堀江 徹	 1
実 施 要 綱		 4
運営委員名簿・運営組織表		 5

I 全 体 会

挨拶

東京都立高等学校副校長会	玉井 篤 会長代行	
東京都公立高等学校定通制副校長会	堀江 徹 会長	 8

教育委員会挨拶

東京都教育庁指導部		
高等学校教育指導部長	高野 敬三 先生	 9

II 分 科 会

分科会のテーマと提案者等一覧	 1 2
----------------	-----------

研究発表と研究協議

第1分科会	 1 4
第2分科会	 2 1
第3分科会	 2 7
第4分科会	 3 7

講 話

「笑いこそ必要」	六代目 春風亭柳朝 師匠	 4 1
----------	--------------	-----------

参加者名簿他

委員会別参加者名簿（全日制課程）	 5 2
委員会別参加者名簿（定時制・通信制課程）	 5 4
研究協議会参加者数の変遷（過去3年間）	 5 6
研究協議会報告のあゆみ	 5 7
編集後記	 5 8

平成20年度 都立高等学校副校長研究協議会実施要領

1. 趣 旨 都立高等学校の個性化・特色化を図り、都民に信頼される魅力ある都立高校づくりを推進するため、直面する教育課題の解決について研究協議を行うことにより、副校長としての見識をたかめ、各都立高校の学校経営ならびに教育活動の充実に資する。
2. 日 時 平成20年8月28日(木) 13:20～17:00
3. 会 場 東京都教職員研修センター(東京都文京区1-3-3)
4. 参加対象
都立高等学校全日制課程副校長 全 員
都立高等学校定時制通信制課程副校長 全 員
5. 内 容
(1) 主 題 都民に信頼される魅力ある都立高校づくりをめざして
(2) 全体会 講話を通して笑うことの大切さを学ぶ
6. 時 程
13:00～13:20 受 付
13:20～14:40 分科会
第1分科会(全日制 管理第一委員会 中部B)
主 題:主幹制度5年目を迎えて ～5年目の総括～
(管理第二委員会 中部D)
主 題:主幹教諭によるT A I M S 端末等の活用の現状と課題
第2分科会(全日制 高校教育第一委員会 西部B)
主 題:奉仕体験活動の実践と副校長の役割
(高校教育第二委員会 東部B)
主 題:魅力ある学校づくり
第3分科会(生徒指導第一委員会 東部D)
主 題:東部Dチームにおけるキャリア教育実践事例の紹介
ーキャリア教育推進における副校長の役割を考えるー
(全日制 生徒指導第二委員会 西部D)
主 題:「小中高 夢のかけ橋推進事業」に果たす副校長の役割
第4分科会(定時制 中部研究会)
主 題:学校経営計画の策定と運用に関する実態調査
14:40～14:55 休 憩
14:55～16:50 全体会 視聴覚室(工芸高)
(1) 開会の辞 全日制副校長会会長代行 玉井 篤
(2) 東京都教育委員会挨拶 指導部長 高野 敬三 先生
(3) 講 話 「笑いこそ必要」 六代目 春風亭柳朝 師匠
(4) 閉会の辞 定通副校長会会長 堀江 徹
16:50～17:00 事務連絡等
終 了

平成 20 年度都立高等学校副校長研究協議会運営委員名簿

役 員			所 属 校	氏 名	学校電話番号
全 日 制	会 長		武 蔵	錦 織 政 晴	0422－51－4554
	会 長 代 行		竹 台	玉 井 篤	03－3891－1515
	副 会 長		雪 谷	都 築 功	03－3753－0115
	副 会 長		市ヶ谷商	高 橋 信 雄	03－3260－9151
	会 計		羽 村	長 島 良 夫	042－555－6631
	会 計		第 一 商	新 井 義 雄	03－3463－2606
	管理運営 研究部会	第1委員会部長	駒 場	下 條 隆 史	03－3466－2606
		第2委員会部長	鷺 宮	佐 藤 洋 彰	03－3330－0101
	高校教育 研究部会	第1委員会部長	北 多 摩	志 村 修 司	042－524－3903
		第2委員会部長	小 石 川	幸 田 諭 昭	03－3946－7171
	生徒指導 研究部会	第1委員会部長	橘	中 村 文 男	03－3617－8311
		第2委員会部長	福 生	熊 谷 通 眞	042－552－5601
定 時 制 ・ 通 信 制	会 長		第 四 商	堀 江 徹	03－3990－4221
	副 会 長		富 士 森	小 川 芳 夫	042－661－0444
	副 会 長		大 森	神 津 良 雄	03－3753－3161
	会 計		新 宿	真 保 俊 哉	03－3354－7411
	研 究 部 長		桜 町	須 貝 徳 成	03－3700－4330
	研究部次長(東部)		葛 西 南	高 坂 仁	03－3687－4491
	研究部次長(中部)		中 野 工 業	松 本 哲 也	03－3385－7445
	研究部次長(西部)		第 五 商	瀧 澤 勝	042－572-0132

平成20年度都立高等学校副校長研究協議会運営組織表

	全 日 制	定 時 制 ・ 通 信 制
世 話 人		
全 体	玉 井 篤 (竹台)	堀 江 徹 (第四商)
第一分科会	安 部 卓 郎 (三鷹) 上 原 徹 (武蔵丘)	
第二分科会	志 村 修 司 (北多摩) 高 橋 信 雄 (市ヶ谷商)	
第三分科会	淵 脇 英 一 (拝島) 佐々木 哲 (科学技術)	
第四分科会		真 保 俊 哉 (新宿) 松 本 哲 雄 (中野工業)
編 集	鳥 屋 尾 史 郎 (白鷗付属中)	須 貝 徳 成 (桜町)
	佐 藤 和 博 (墨田川)	真 保 俊 哉 (新宿)
	都 築 功 (雪谷)	滝 澤 勝 (第五商業)
	有 馬 利 一 (松が谷)	
	清 水 政 義 (多摩工)	
会 場 ・ 記 録 責 任 者		
全 体	(会) 高 橋 信 雄 (市ヶ谷商) (記) 都 築 功 (雪谷)	(会) 須 貝 徳 成 (桜町) (記) 真 保 俊 哉 (新宿)
第一分科会 (全日制)	中部B (会) 下 條 隆 史 (駒場) (記) 笹 のぶえ (都立大附) 中部D (会) 佐 藤 洋 彰 (鷺宮) (記)	
第二分科会 (全日制)	西部B (会) 志 村 修 司 (北多摩) (記) 須 賀 秀 次 (農業) 東部B (会) 幸 田 諭 昭 (小石川) (記) 玉 井 篤 (竹台)	
第三分科会 (全日制)	東部D (会) 佐々木 哲 (科学技術) (記) 高 石 公 一 (第三商業) 西部D (会) 熊 谷 通 眞 (福生) (記) 渡 邊 博 史 (東大和) (記) 西 塚 春 義 (小平南)	
第四分科会 (定時制)		(会) 真 保 俊 哉 (新宿) (会) 松 本 哲 雄 (中野工業) (記) 西 田 豊 (杉並) (記) 高 木 亀 介 (松原)
全体 司会	都 築 功 (雪谷)	
会 計	長 島 良 夫 (羽村) 新 井 義 雄 (第一商)	真 保 俊 哉 (新宿)

全 体 会

開会挨拶

東京都立高等学校副校長会

玉 井 篤 会長代行

教育委員会挨拶

東京都教育庁指導部 指導部長

高 野 敬 三 先生

講師紹介

東京都立高等学校副校長会会長代行

玉 井 篤 会長代行

講 話

「笑いこそ必要」

六代目
春 風 亭 柳 朝 師匠

謝 辞

東京都公立高等学校定通副校長会

堀 江 徹 会長

閉会挨拶

東京都公立高等学校定通副校長会

堀 江 徹 会長

司会・記録

司会 都築 功（全・副会長）

記録 高橋 信雄（全・副会長）



開 会 挨 拶

東京都立高等学校副校長会
会長代行 玉井 篤（竹台・全）

皆さん 今日は、すでに夏季休業が終わっている学校もあると伺っております。副校長研究協議会にご出席いただき、ありがとうございます。

前半の分科会での発表、意見交換、ありがとうございました。発表された地区、発表者の方々、指導・助言をいただきました先生方、分科会の運営に当たられた先生方に心より御礼申し上げます。

7月下旬に、全日制は福島県で、定時制・通信制は山形県でそれぞれ全国大会が開催されました。全日制の大会宣言のスローガンの一つに、「教頭・副校長の研修・研鑽、経験を交流する機会の拡大と充実」がうたわれております。「経験を交流する」という部分は昨年度より付け加えられたものでございます。大会宣言は言ってみれば副校長会の組織目標であります。毎月の副校長連絡会、さらに本日の副校長研究協議会を通して、「経験の交流」が一層、図られますことを期待いたします。

本日は、ご多用の中、来賓として、教育庁指導部長 高野敬三先生、指導部主任指導主事 出張吉訓先生、指導部高等学校教育指導課 総括指導主事 藤野靖郎先生、をお迎えしております。高野先生からは後ほど東京都教育委員会挨拶をいただくことになっております。また、講師として落語家の六代目春風亭柳朝師匠をお迎えいたしました。話術・笑い・コミュニケーションなどについて講話をいただきます。

では、これより平成20年度東京都立高等学校副校長研究協議会全体会をはじめます。



閉 会 挨 拶

東京都公立高等学校定時制通信制副校長会
会長 堀江 徹（第四商業・定）

本日は二学期始業式直前のご多忙の中、年に一度の都立高校副校長研究協議会にご出席いただきありがとうございました。また、ただいまご講演をいただきました春風亭柳朝師匠、終始笑いの絶えない楽しいお話の中で、人間関係に大切なコミュニケーションについて教えていただいた気がいたします。大変ありがとうございました。

さて、東京都の高校改革推進計画も新たな実施計画が完成の時期を迎え、学校の再編等の影響により、副校長会として対応すべき課題も、従来からのものに加え、新しい社会状況や、この再編に伴う組織上の課題など、まだまだ全体で情報を共有して研究を重ね、解決の道を探らなければならないものが多くあります。今後とも副校長が一堂に会して研究の成果を発表し合うこのような場を益々充実発展させていきたいと思っております。

最後になりますが、本日発表された副校長先生方、ご指導・ご助言・ご講評をいただきました先生方、そして研究行儀会の準備と運営にお骨折りいただきました先生方に厚く御礼を申し上げます。閉会の言葉といたします。

教 育 委 員 会 挨 拶

東京都教育庁指導部

指導部長

高野 敬三 先生

平成二十年度東京都立高等学校副校長研究協議会が開催されるに当たり、東京都教育委員会を代表して一言ごあいさつを申し上げます。

まず、副校長の皆さんが、都立高等学校、都立中等教育学校の充実・発展のために、個々、力を尽くしていただいていることに対して、お礼申し上げます。

この副校長研究協議会は、都立高等学校、都立中等教育学校における個性化や特色化を図るとともに、都民に信頼される魅力ある都立高校づくりを推進するため、直面する教育課題の解決について研究協議を行い、副校長の見識を高め、学校経営ならびに教育活動の充実に資することを目的としたものです。

本日の研究協議会に向け、多忙な職務の中で、都立高校の喫緊の課題に対する調査研究等を精力的に進められた各副校長、さらに、研究成果を発表なさった副校長の皆さんに感謝申し上げます。

さて、国際化、高度情報化、少子高齢化などが急速に進む現代社会において、子供たちを取り巻く家庭環境や社会環境が大きく変化する中、副校長は、学校の多様な課題の解決に向け、学校運営の中心的な役割を担って職務にあたっています。副校長の職務が様々ある中で、どの仕事に重点において仕事をしていくかということは、職務が多忙であればあるほど意識をしなければならないところudur。

平成十九年十月に東京都公立学校の副校長・主幹を対象に実施した「副校長・主幹の職務等に関するアンケート調査」によれば、副校長として重点を置きたい職務については、約九割の副校長が「校長のパートナーとしての経営参画」をあげ、続いて「教職員の育成」をあげています。この二点は、まさに、副校長の重要な職責であるとともに、やりがいのある職務でもあります。日々の職務の中で目標や計画を立て、具現化していくことが必要です。

ところで、国においては、この秋の告示を目指し、高等学校学習指導要領の改訂が進められています。また、東京都教育委員会では、本年五月に「東京都教育ビジョン（第二次）」を発表しました。新ビジョンは、「十年後の東京」の基本的な考えを踏まえ、関係各局の協力を得て、新たな取組の方向や重点施策、五年間を計画期間とした推進計画を示したものであり、また、教育基本法第十七条の「教育振興基本計画」に位置付けられるものでもあります。御承知のとおり、この新ビジョンでは、東京都が目指す教育として、大きく二つのことを示しています。一つは、家庭、学校、地域、社会の連携を強化するとともに、外部人材を積極的に活用して、社会全体で子供の教育に取り組むことです。

その一例として、東京都は、平成二十五年に国民体育大会を開催するとともに、平成二十八年に行われるオリンピックの招致活動も行っていることを踏まえ、生徒・保護者、地域社会の期待に応える指導体制の充実を図るとともに、外部人材を学校や地域の教育活動に積極的に活用していく仕組みを整えていきます。そのため、スポーツ教育推進校や国体強化部活動候補校を指定し、部活動による競技力を向上させるなど、運動部活動の振興を図っていきます。

もう一つは、次代を切り拓く力を育成するとともに、「確かな学力」を育成し、「生きる力」をはぐくむ教育を推進することです。

その一例として、全都立学校への校内LANや、ICT機器を活用した授業を促進するための環

境を整備していきます。また、都立学校のすべての教員がＩＣＴ機器を活用した授業を行うことができるよう、教員の指導力の向上を図っていきます。

今後は、この新ビジョンに基づく、学校経営の工夫・改善が重要になってきます。こうした中で、副校長の皆さんが研究協議会における研究を通して、高い識見と先見性、豊かな人間性を備えた副校長としての資質向上を図るとともに、校長先生の学校経営計画の策定にかかわり、それを具現化していくことは、まさに時機を得たものであると考えております。

本日は、管理運営・高校教育・生徒指導の三部会から、七つの研究成果について、各部会の代表である副校長先生から口頭発表が行われました。発表テーマは、「学校経営計画」「主幹制度」「主幹教諭のＴＡＩＭＳ端末の活用」「魅力ある学校づくり」「夢のかけはし推進事業」と広く学校経営にかかわることや、「奉仕体験活動」「キャリア教育」等、各学校の特性を生かし、生徒や地域に応じた教育実践に寄与するものなど、まさに現在の都立高校が必要としている、様々な教育課題の解決に向けた研究といえます。どうか本日発表されました、これらの研究内容が、各学校の教育活動の発展に結び付けられますようお願いいたします。

結びに、本日の研究協議会を通して行われた、副校長先生同士の情報交換、そこで得られた知識や情報を自校の教育活動の場において活用されることを望んでおります。本協議会が充実したものとなりますことをご期待申し上げ、私のあいさつとさせていただきます。



分 科 会

中心主題

都民に信頼される魅力ある都立高校づくりをめざして

分 科 会

第 1 分科会

教育課題	中部 B	－主幹制度 5 年目を迎えて～5 年目の総括－（全）	1 4
	中部 D	－主幹教諭による T A I M S 端末等の活用の現状と課題－（全）	1 7
助言者		全国高等学校長協会事務局長 小栗 洋 先生	

第 2 分科会

教育課題	西部 B	－奉仕体験活動の実践と副校長の役割－（全）	2 1
	東部 B	－魅力ある学校づくり－（全）	2 4
助言者		都立小平西高等学校長 田中 政美 先生	

第 3 分科会

教育課題	東部 D	－東武 D チームにおけるキャリア教育実践事例の紹介－（全）	2 7
	西部 D	－「小中高 夢のかけ橋推進授業」に果たす副校長の役割－（全）	3 2
助言者		前都立立川高等学校長 大澤 充二 先生	

第 4 分科会

教育課題	中部研究会	－学校経営計画の策定と運用に関する実態調査－（定）	3 7
助言者		都立一橋高等学校長 寶槻 広 先生	

平成20年度都立高等学校副校長研究協議会

〔研究主題〕 都民に信頼される魅力ある

分科会	地区	発 表 テ ー マ		提 案 者	司 会 者
第1分科会	中部B	主幹制度5年目を迎えて ～5年目の統括～	全	安部卓郎（三 鷹）	櫛野 治和 （世田谷総合）
	中部D	主幹教諭によるTAIMS端末 等の活用の現状と課題	全	上原 徹（武蔵丘）	佐藤 洋彰（鷺 宮）
第2分科会	西部B	奉仕体験活動の実践と 副校長の役割	全	志村 修司（北多摩）	長崎 正（国 立）
	東部B	魅力ある学校づくり	全	高橋 信雄（市 谷）	高橋 進（荒川商業）
第3分科会	東部D	東武Dチームにおける キャリア教育実践事例の紹介 —キャリア教育推進における 副校長の役割を考える—	全	佐々木 哲（科学技術）	白井 克昌（本 所）
	西部D	「小中高 夢のかけ橋推進事業」 に果たす副校長の役割	全	湊脇 英一（拝 島）	熊谷 通眞（福 生）
第4分科会	定通制	学校経営計画の策定と 運用に関する実態調査	定通	真保 俊哉（新 宿） 松本 哲雄（中野工業）	宮田 茂（足 立）

分科会発表主題・提案者一覧

都立高校づくりをめざして

平成20年8月28日

記 録 者	会場・記録責任者	研究幹事	指導助言
笹 のぶえ (都立大附)	下條 隆史 (駒 場)	小林 淑訓 (大 崎)	全国高等学校長協会事務局長 小栗 洋 先生
		上原 徹 (武蔵丘)	
須賀 秀次 (農 業)	志村 修司 (北多摩)	久保田 弘 (農 業)	都立小平西高等学校長 田中 政美 先生
玉井 篤 (竹 台)	幸田 諭昭 (小石川)	桑原 洋 (美 原)	
高石 公一 (第三商業)	佐々木 哲 (科学技術)	遠山 孝典 (両 国)	前都立立川高等学校長 大澤 充二 先生
渡邊 博史 (東大和) 西塚 春義 (小平南)	熊谷 通眞 (福 生)	瀧脇 英一 (拝 島)	
西田 豊 (杉 並) 高木 亀介 (松 原)	真保 俊哉 (新 宿) 西田 豊 (杉 並) 松本 哲雄 (中野工業)		都立一橋高等学校長 寶槻 広 先生

第一分科会

「主幹制度5年目をむかえて～5年目の総括～」

中部Bチーム副校長会

管理運営研究部第1委員会

提案者 都立三鷹高等学校副校長 安部 卓郎

I 研究のねらいと方法

主幹教諭は、副校長と教諭の間に位置する職であり、学校改革を担う新たな職として、制度が始まってから6年目を迎える。都立高校中部B地区副校長会では、主幹制度5年目を終えてその現状と課題について、5年間の総括という意味をこめて、本研究を実施した。

研究のねらいは、主幹教諭の動きを日ごろから良く見ている副校長が、現場から得られる情報を集めて分析し、副校長として、主幹を学校改革に効果的活用するための方途を探ることとした。

本研究では、中部地区全日制都立高校副校長を対象として、これまでの経験や現状について、2回のアンケート調査を実施し、分析後その結果をまとめた。1回目は平成19年12月以降に実施したアンケート調査では現任校の主幹についての課題と主幹制度について都への要望が多く示された。

この結果を受け、2回目を平成20年4月に、「日頃どのように主幹教諭とのコミュニケーションをとっているか」「主幹教諭自身が、力点を置いている点」は何か、などの項目で、2回目のアンケート調査を行った。

十分な回答数が得られたとは言えないが、各校副校長からの貴重な生の声が寄せられたと考える。今回の研究結果が、各校の主幹をより生かして、学校の活性化に役立つことを願う。

II 研究内容

東京都で主幹制度が始まった平成15年度の調査では138校の副校長から回答を得た。平成19年度は、27校、82名の主幹教諭について回答を得た。数値項目では可能な限り対比させ、記述項目では、記載された内容を関連あるものをまとめる形で整理した。

1 集計結果

項目1

「主幹教諭の配置」については、平成15年度では、1名配置が多かったのに対し、平成19年度の

中部地区では、4人以上の配置も多くなっている。

項目2

「主幹教諭の配置先」については、平成15年度では、教務部、ついで生活指導部、進路指導部の順であったのが、平成19年度では教務部、ついで学年が多い。

項目3

「主幹教諭の年代」については、平成15年度では、50歳代が多かったのに対し、平成19年度では、40歳代が多くなっている。

「主幹教諭の現状」をとらえてみると、「十分できている」との回答が平成15年度、19年度とも多かった項目は、「担当分掌の管理進行」「学校の課題解決力の向上」である。各校とも、主幹教諭が学校課題の解決を図る役割を果たしている実態がうかがわれる。これらに対し、「人材育成」「分掌間の連携」の2項目は、主幹制度が始まって以来、思うように進まず、大きな課題となっていると考えられる。

次に、副校長による主幹教諭の指導の結果については、平成15年では、リーダーシップを図るため主幹教諭に「活躍の場」を与えるが57.2%、「分掌運営」への指導助言を与えるが49.3%と多く、主幹制度が始まった頃は、業務を明確に与えること、特に分掌の主任として、主幹教諭を指導していたことがわかる。

平成19年度では、「活躍の場」が59.3%と変わらない一方、「分掌運営」が74.1%、「課題解決」が66.7%と大きく増えている。平成15年度では、回答がなかった「主幹会議」は、平成19年度では17校で行われ、主幹会議が定着してきたことがうかがえる。

記述項目

「副校長が主幹教諭に期待していること。」では、「学校全体を視野に入れた経営意識をもつこと。」「担当分掌だけでなく、学校運営全体に関与すること。」「学校経営の中心的存在となること。」などの回答があった。

回答をまとめると、主幹教諭に教員の手本となるような資質をもつこと、副校長を補佐し、広い視野

と経営意識をもつこと、学校の組織化を積極的に行える人材であることを強く求めていることが分かる。

平成19年度の「主幹制度の課題」という項目では、「学校全体の視点で考える経営意識の向上が課題。」「主幹教諭が管理職と教諭の間のパイプ役に立っていない。」「主幹教諭の能力差が大きい。」などの回答があった。

一連の結果を受け、平成20年4月に追加実施したアンケート調査結果では、「主幹教諭自身が心がけていること、力点をおいていること」という項目では、「管候補としてコミュニケーションを重視、課題発見と指針の提示。」「一分掌の立場ではなく、学校経営計画の実現に学校の全体的な視野で具体的な方策を提案調整、実行している。」などの回答があった。

これらの回答からは、主幹教諭自身も管理職とのコミュニケーションを重視し、管理職を積極的に補佐しようという姿や学校の中で自らのすべきことを意識して懸命に頑張っている姿がうかがえる。

「実際に主幹教諭が行っていることや成果をおさめた事例」という項目では、懸命に頑張る成果を挙げている事例が寄せられた。「三宅島緑化プロジェクト、クリーン作戦などの地域貢献活動を推進した。」「生徒募集委員会に配置、生徒募集対策を検討し、出前授業、学校説明会を推進した。」「教員を説得して授業評価導入、授業の相互参観日を実現した。教務主幹が副校長の進行管理の補佐を行った。」などの回答が寄せられた。

回答を得た事例には、課題解決に向けて、主幹教諭が具体的な方策をもち、副校長からの指導、助言を得て粘り強く努力する姿がうかがえる。関連した副校長のコメントとして「校長と副校長の思いを主幹に徹底して伝え、それを基に納得できるまで話し合い、自らの責任で動けるよう指導に努めてきた。」

「主幹会議とは別に、管理職と主幹の間で、自由に意見交換を行う場（雰囲気）を意識的に設定する。」などが示されている。

主幹教諭が責務を遂行するために、副校長と主幹教諭が十分にコミュニケーションをとり、主幹教諭のモチベーションを高め、課題解決に向けた適切な支援を行っていくことの重要性が改めて示されている。

主幹制度が始まった時からの大きな課題である、「主幹教諭の発掘・育成」では、「主幹教諭の発掘」については、「候補者の選定と地道な声かけを行う。そのためには、日ごろから人間関係を構築する。」「これはと思う教員を粘りよく説得する。」という前向

きな回答と、「教諭が副校長の忙しさを見ているとやる気にはならないという意見や、職場が管理職への道を強くすすめるににくい状況にある。」などの回答がある。

学校によってさまざまな状況があり、人材発掘に苦勞している姿が浮き彫りになっている。教員に対し、日常的な校務を通じて、副校長が主幹教諭の職務の魅力として主幹教諭の職が学校の組織化にとって重要なポストであるということを意識付け、主幹教諭の資質をもった教員を見つけ、粘り強く説得することが必要である。

「主幹教諭の育成」については、「副校長が方針を明確化し、主幹教諭にあった課題の設定を行い OJT の中で育成する。」「能力や資質に合わせて新たな仕事をまかせ、達成を促すことを通して、主幹教諭としての意識を醸成していく。」などの回答がある。

主幹教諭自身が職の意味を認識していないという意見や管理職候補者である主幹教諭とそうでない主幹教諭に意識の差があるという回答もある。副校長が主幹教諭一人一人の特性を把握し、主幹教諭に任せる業務の意義を理解させ、日常業務の中で成功体験を経験させることで自信を与えるとともに、主幹教諭のモチベーションを維持させていくことの大切さが示されている。

2 考察

主幹制度が始まって5年を過ぎ、主幹教諭の各校での取組を通して、学校組織の鍋蓋構造が改善され、主幹教諭が各校に定着してきたことがわかる。教務、進路指導、生活指導の三主任だけでなく現在では学年主任にまで配置が拡充されつつある。制度が始まったころは、分掌の管理が主な役割であったが、今では学校経営の一役を担い、学校の新たなプロジェクトの推進を担うことや校長、副校長を補佐するための情報収集、課題に対する適時の提案や具申を行っている事例も寄せられている。

校長、副校長は、成果を上げている主幹教諭に対し、具体的な目標を明確に示し、主幹会議や日常の連絡・調整を通して主幹教諭とコミュニケーションを十分にとり、主幹教諭が動きやすい環境をつくり励まし、支援を行っている。

主幹教諭を発掘する際に、日々多様でスピードを求められる管理職の業務を、補佐できる主幹教諭を求める副校長も多いことが示された。多くの副校長は仕事の中で、主幹がモチベーションを高め、使命感をもって業務を行えるようにすることを目指して

いる。主幹をより一層活用するためには、主幹の複数配置を求める声も多い。

また、主幹教諭の研修等の実施により課題や悩みを共有し、広い視野と使命感をもてるような機会を、都教育委員会に求める声もある。これは、多くの都立高校から参考になる実践や成果を集め、自校の取組に息吹を与える機会をつくって欲しいという副校長の切なる願いでもある。

3 まとめ

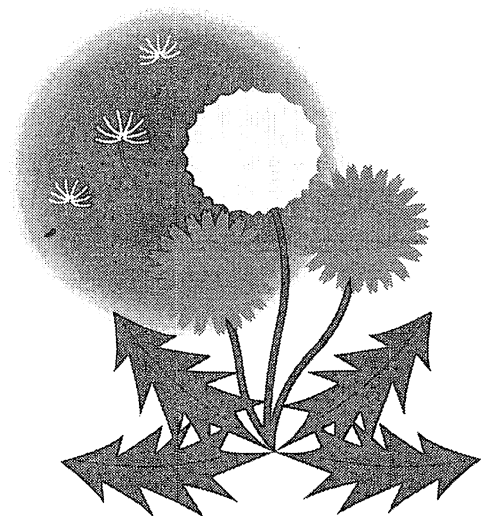
主幹制度6年目に入り、主幹教諭の役割はますます重要となっている。一方、人材発掘、育成では各校の副校長は懸命に努力しているものの、十分な結果が得られているとは言い難い。

主幹教諭自身も管理職と教員の間で、迷い悩みながら日々頑張っている。この研究を通して、各校の副校長が、自校の主幹教諭を大きく育てることが、都民の期待に応える都立高校として、未来を拓く大きな鍵になることを痛感した。

III おわりに

本研究を進める上で、貴重な意見を寄せていただいた中部地区の都立高校の副校長並びに協議のために貴重な時間を与えていただいた中部学校経営支援センターはじめ都教育委員会、ご指導いただきました校長先生他関係各位に、心より感謝申し上げます。

質疑応答
なし



主幹教諭によるT A I M S 端末等の活用の現状と課題

中部Dチーム副校長会

管理運営研究部第2委員会

提案者 都立武蔵丘高等学校副校長 上原 徹

I 研究のねらいと方法

平成18年度から、主幹教諭の業務の効率化、事務的業務の軽減を目指して、主幹教諭にT A I M S 端末が配備された。そこで、本研究部では、主幹教諭の業務の効率化と事務的業務の軽減に向けて、T A I M S 端末の活用がどのように図られているのか、その現状と課題について調査した。調査は、平成19年12月から平成20年3月上旬にかけて、中部C・Dチームの22校の主幹教諭に対して、アンケート方式で行った。

II アンケートの調査項目等について

今回の、アンケートの調査項目は、以下の通りである。

- 1 T A I M S 端末からの起案について
- 2 ロータスノーツ機能の活用状況について
 - (1) メールの利用について
 - (2) 調査等の提出について
 - (3) 各種の「掲示板」等を利用した情報収集について
 - (4) カレンダーを利用したスケジュール管理について
 - (5) (1)～(3)以外で利用している機能について
 - (6) ノーツ機能としてのパソコンの利用時間(一日平均)について
 - (7) ノーツの利用に関する要望等について
- 3 インターネットの利用状況について
 - (1)「庁内ポータルサイト」からの東京都の情報検索について
 - (2)出張時等の交通経路の検索について
 - (3)地図の検索について
 - (4)校務分掌にかかわる情報検索について
 - (5)授業準備にかかわる情報検索について
 - (6)(1)～(5)以外で利用している機能について
 - (7)インターネット機能としての利用時間(1日平均)について
 - (8)インターネットの利用に関する要望等について
- 4 T A I M S 端末の操作にかかわる研修について
 - (1)研修への参加回数について

(2) 研修に対する要望等について

5 T A I M S 端末利用上の成果について

6 T A I M S 端末利用上の意見について

以上、調査項目は大きく6項目であり、中部C・Dチームの22校、32課程の主幹教諭に対して、アンケート方式で行い、46名の主幹教諭から回答があった。

III アンケートの結果及び結果の分析について

- 1 「1 T A I M S 端末からの起案について」「2の(1)メールの利用」「2の(2)調査等の提出」「2の(3)各種の掲示板等を利用した情報収集について」については、「よく利用している」「利用したことがある」を合わせると、各項目とも約60%～70%と比較的高い数値となっている。その利用が進んでいると思われる。しかし、「1 T A I M S 端末からの起案」では、20%が「利用したことがない」と答えており、「2の(2)調査等の提出」では、22%が「利用したことがない」、4%が「機能自体が分からない」と答えている。起案の作成、調査等の提出は、主幹教諭の基本的な日常業務であり、今後とも、全ての主幹教諭においてT A I M S 端末の活用が求められる。また、起案の作成、調査等の提出については、副校長の主幹に対するT A I M S 端末操作の技術的な指導も必要である。
- 2 「2の(4)カレンダーを利用したスケジュール管理」については、26%が「あまり利用していない」、59%が「利用したことがない」と答え、活用は進んでいない。現状では、利用の必要性がないと推測される。校内での会議、出張等、多忙な主幹教諭にとって、スケジュール管理は重要であり、今後とも、その利用が望まれる。
- 3 「2の(5) ロータスノーツ機能として(1)～(3)以外で利用している機能」としては、「都立学校所在地一覧からの地図の利用」「各局のデータベースの利用」「例規集等の利用」などが挙げられている。
- 4 「2の(7) ロータスノーツの利用に関する要

望等」については、バージョンアップするごとに、起動が重くなっているような気がする。」「画面のレイアウトが見にくい。」など、ロータスノーツの機能面の改善についての要望が多くなっている。

- 5 「3の(1)庁内ポータルサイトからの東京都の情報検索」「3の(2)出張時等の交通路の検索」「3の(3)地図の検索」については、「よく利用している」「利用したことがある」を合わせると、約50%～60%となり、各項目とも比較的利用が進んでいる。それとは対照的に、「2の(4)校務分掌にかかわる情報検索について」では、28%が「あまり利用していない」、31%が「利用したことがない」、9%が「機能自体が分からない」と答え、活用が進んでいない。学校等にある資料等からの情報活用が中心になっていると思われる。
- 6 「3の(6)インターネット機能として(1)～(5)以外で利用している機能」としては、「他校の行事日程や内容の情報検索」「生活安全にかかわる情報検索」「行事日の前日などの天気の確認」「新聞社等のホームページからのニュースの閲覧」「インターネット上での所属校に対する書き込み情報の検索」などが上げられており、多様な分野での活用が行われている。特に、「インターネット上での所属校に対する書き込み情報の検索」については、生徒等の個人情報の保護、人権侵害などの問題から、今後、生活指導上の取組として、定期的なチェックが必要である。このことについての、主幹教諭の活用も必要になってくる。
- 7 「2の(8)インターネット利用についての要望等」については、「スクリプトは安全ですかというコメントをその都度クリックしながらサイトを閲覧しなければならないことが不便である。」「回線速度を向上して欲しい。」などといったインターネットの機能の向上についての要望が多くなっている。また、「業務上で確認したいサイトがあっても閲覧することが制限されていることがあり、不便である。」といった、生活指導上の問題からの要望もある。
- 8 パソコンの利用時間について、「ノーツ機能としてのパソコンの利用時間(1日平均)」は、47%が「30分未満」、インターネット機能としてのパソコンの利用時間(1日平均)は、59%が「30分未満」と答えている。主幹教諭の日常は、非常に多忙である。授業を行い、分掌業務をこなし、部活動の指導を行うなど、日々、多忙を極めている。しかし、逆に、多忙な中で、主幹教諭の校務

の縮減・効率化に向けた、TAIMSの有効活用を考えることが必要である。TAIMSを活用し、主幹教諭の校務の縮減・効率化の工夫をどう図っていくか、副校長の果たす役割は大きいといえる。

- 9 「研修会への参加回数」については、72%の主幹教諭が「1回以上参加した」と答え、研修受講の経験をもっている。しかし、その一方で、28%の主幹教諭が、「1回も研修を受けていない」と答えている。また、今回の調査のほとんどの調査項目について、「機能自体が分からない」と答えた主幹教諭がいるが、研修受講経験との関連もうかがえる。各種機能が理解できていない主幹教諭の積極的な研修への参加が求められる。
- 10 「研修に対する要望等」については、「1回の研修ではよく理解できなかった。学校では、副校長に分からないところを聞きながら使っているが、目的別・レベル別に再度研修の機会を設けて欲しい。」「夏季休業期間中などに、操作の熟達レベルに合わせた研修を行って欲しい。」「研修があったこと自体知りませんでした。全員参加の研修会を実施してもらえれば助かる。」「研修は、短時間であっても演習等を交えてあり、よく企画された内容であった。しかし、現場に戻ると忙しく、反復練習ができず、ほとんど忘れてしまったのが現実です。」などといった、研修の機会を求める意見が多くあった。1回の研修受講では不十分さが残り、再度、研修が必要になっている主幹教諭もいる。今後とも、日々、多忙を極める主幹教諭が、研修に参加できる環境づくり、また、TAIMSの操作技術の向上は、毎日、継続的に使用し、慣れることが必要であることから副校長による、ごく日常的な操作技術についてのアドバイスも求められる。

IV TAIMS利用上の成果と意見

1 成果

「効率的に起案処理ができるようになった。」「個人端末になり、組織端末を共有して閲覧できるようになり、便利になった。」「個人端末が自席にあるので、校務上の書類作成などの効率化が図れている。」「今まで、副校長を通して得られた情報が、自ら入手でき、早めに作業に取りかけられるため業務の効率化が図れている。」など、業務の効率化が図れるようになったとの回答が多くなっている。その他、「校内はもとより、他校との情報交換、情報共有が可能となり、広い視野での東京都の教育

の状況が把握しやすくなった。」「文書管理が便利になった。また、都や教育委員会のホームページを閲覧する機会が増えた。」などといった、業務や教育活動の向上につながっているといった意見もある。

2 意見

「文書作成にかかわる仕事が増えた。」「個人端末が貸与され、便利になった点も多いが、それに倍する調査等も増え、授業や生活指導等の本来の業務に支障を来していると思える。」と言った意見がある。起案作成、調査等の作成等は、本来、主幹教諭の業務であるが、個人端末の配置を契機にこれらの業務が、主幹によって行われるようになり、仕事の負担感が増したのではないかとも思われる。その他、「学校で過去に作成したデータはワープロソフト一太郎が多い。一太郎が使用できないのは、大変不便である。」「教育に関する情報の収集が容易になった。しかし、授業準備の効率化のために、教員全員にコンピュータを配置することが必要である。」などの意見・要望もある。

V おわりに

平成21年度からは、主幹教諭だけでなく、教員1人につき1台のパソコンの配置が実現する予定である。教員のTAIMS端末の活用の推進に関して、指導的役割を果たさなければならないのは主幹教諭である。一方、生徒の氏名、住所、成績等の個人情報が入ったUSBメモリの流出事故も後を絶たない。教職員の情報モラルの一層の向上が求められている。

今回の調査は、平成19年度に行った。現状は少し変わってきていると思われるが、今回の主幹教諭によるTAIMS端末の活用に関する調査の結果から、まだまだ、課題が残されていると思われる。教育管理職等の任用・育成の在り方検討委員会第二次報告「副校長・主幹教諭の育成及び職の在り方について」の中で、「校務の縮減と効率化について、TAIMSの有効活用とともに考える必要があろう。」と述べられている。今後とも、各学校の教育活動の充実のため、TAIMS端末の活用の一層の工夫を図り、各学校の課題解決を図っていくことが必要である。

VI 質疑応答

松原高校：ノーツ機能の利用が30分以下は短いと考えるが、理想的な利用時間はどの程度と考えているか。

提案者：理想的な時間は、特に考えていない。

松原高校：TAIMS端末で起案をしていないとの回答があるが、その主幹教諭は組織端末から起案をしていると考えて良いのか。

提案者：組織端末を含めたTAIMS端末から起案をしていないのではないかとと思われる。

千歳丘：職員室が大職員室、または教科別という形態についての調査は行ったのか。

提案者：行っていない。

指導・講評

全国高等学校長協会事務局長

(前東京都立町田高等学校長)

小栗 洋 先生

「主幹制度5年目をむかえて ～5年目の総括～」

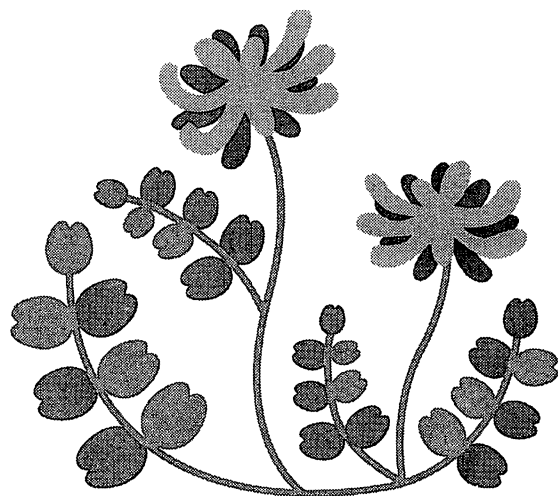
主幹制度について、平成15年度と平成19年度のアンケート調査の結果を比較すると、良くなっている部分が少しずつ増えていることが分かります。特に、平均年齢が50歳代から40歳代と低くなってきたことは良いことだと思います。現在、授業力の向上が喫緊の課題であります。教員同士の授業参観を行う場合は、主幹教諭を活用することが良いと考えます。

今、主幹教諭の発掘が大きな課題となっています。資質がある教諭には、副校長として、自分がなぜ管理職試験を受験したのか？その思いを語ってほしい。また、毎日、主幹教諭とはコミュニケーションを取って欲しい。必ず悩みを抱えているので、それを聞いて欲しい。悩みを聞いた場合は、数日後、もう一度聞くことが大切。また、話を良く聞くことで、問題を解決する場合もある。順番を追って聞くことが大切である。「いそがしい」という言葉は使わない方がよいですね。

「主幹教諭によるTAIMS端末等の活用の現状と課題」

コンピュータ、メール等には、光と陰の部分があります。光の部分としては、業務の効率化が図れる、情報を収集することで視野が広がる等があります。陰の部分としては、一点目は、情報管理が必要になります。情報の紛失・流出はPCが増えれば、その危険性も増えます。二点目には、誤りが増えます。手書き

の文書と比べると、ワープロソフトで作成した文書はとてもよく見えてしまいます。綺麗に見える分、誤りを見落としてしまいます。三点目として、コミュニケーションが減ることです。現在、私企業が重視する企業人の資質としてコミュニケーション能力、チャレンジ精神、主体性、協調性の順であり、学業成績は15番目です。メール等は人の顔を見ないで何でも書ける。これでは、コミュニケーション能力は伸びない。最後に、子供の利用について。日本は見知らぬ人とコンタクトできるものを子供に与えています。他の欧米諸国では与えていません。そこで、企業はフィルタリングによる保護、子供への指導は学校がやらなければならない。核家族化により、親子のコミュニケーションが少なくなって、本来家庭で行われていた子供への教育についても学校が関わりをもたなくてはならなくなっています。



第二分科会

奉仕体験活動の実践と副校長の役割

西部Bチーム副校長会

高校教育研究部第1委員会

提案者 都立北多摩高等学校副校長 志村 修司

1 はじめに

本研究は、農業高等学校の久保田弘先生、南多摩高等学校の常国佳久先生、国立高等学校の長崎正先生との共同研究である。

東京都は全国に先駆けて平成19年度より教科「奉仕」を実施した。昨年度の副校長研究協議会の報告では、必修化初年度に向けての取組と副校長の役割についてアンケートを実施・分析した。

今年度は実際に「奉仕」1年目の取組（現状）と今後の課題についてまとめた。

2 教育課程上の位置付とアンケート調査

「奉仕」の教育課程上の位置付けは、

- ① 週時程に組み込んで35時間で実施。
- ② 「総合的な学習の時間」の代替として実施。
- ③ 特定の日や期間に集中して実施。
- ④ ポイントリザーブ制で実施。

なお、このアンケートに回答いただいた83校の副校長先生方に感謝の意を表したい。

3 アンケート結果の分析

項目(1)～(4)について

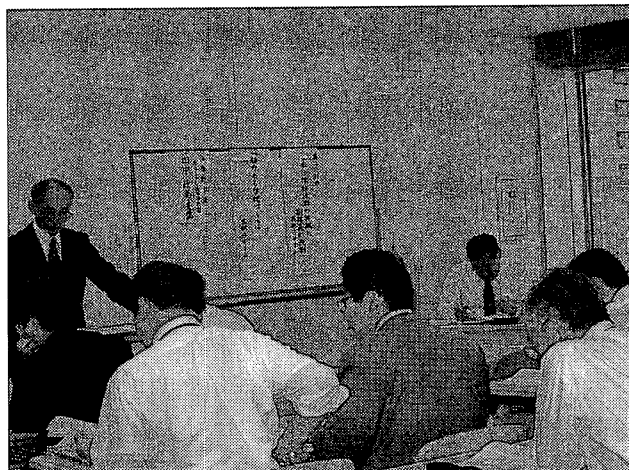
8割以上の学校が教科「奉仕」を第1学年で実施しており、それを運営している組織は56.6%が学年の担当者と各分掌からの担当者及び副校長等で構成されている。教科「奉仕」の評価担当者は8割近くが担任で、担任以外と回答したところでは、体験活動のグループの担当者等が評価をしている。

項目(5)～(6)について

約半数の学校が「総合的な学習の時間」の代替として実施している。すでに「総合的な学習の時間」が実施されている状態で、教科「奉仕」が導入された。これは、「総合的な学習の時間」の学習活動としてボランティア活動を含んでいた学校が多く、また各教科の単位数をできるだけ削らないで教科「奉仕」を導入した経緯にもよるものと考えられる。

項目(7)～(8)について

2割を超える学校でポイントリザーブ制を実施し



ている。ポイントリザーブ制の利点はその学校の実態に合わせて35時間の授業時数を割り振ることができる点である。多くは2年生までに履修できるようになっているが、3年間で履修する学校もある。例えば1年17時間、2年14時間、3年4時間というような例もある。

項目(9)について

東京都教育委員会作成の準教科書「奉仕」の感想は、使いやすいという意見が多かった。何をどのように実施したらいいかわからないときに方向性を示してくれたという意見があった。準教科書の内容が多岐にわたるため、各学校は「奉仕」の実施形態に合わせて必要などところを使っている。

項目(10)～(14)について

奉仕体験活動の時間数については、35単位時間のうち、少なくとも半分はあてるようにということであり、18時間と設定する学校が最も多い。

奉仕体験活動の担当教員1人当たりの担当生徒数は、20人または40人というところが多い。これは、1クラスを担当1人で担当するか、副担任と2人で担当するケースである。

奉仕体験活動のグループの形態、グループ数や実施場所に関しては、大きな公園などで一斉活動をするか、クラスごとに分かれて活動するか、さらに小さなグループに分かれて活動するかであり、これは各学校の事情による。また、奉仕体験活動を全員が

一箇所で活動する時間と、小さなグループに分かれて活動する時間に分けて実施するような例も見られる。

体験活動の代表的な例としては、大人数でできる地域の祭りやイベントの手伝い、大きな公園や地域の清掃などがある。幼稚園や小学校、さらには老人ホームでの交流やスポーツ教室などもある。

また、植林活動、児童書の点訳活動、里山づくり、防災・災害救援マップの作成や救命法講習なども数は少ないが挙げられている。

項目(15)～(16)について

長期休業中の奉仕体験活動を実施している学校は43.2%である。週時程、期末考査後の日程に入っていない学校は長期休業中に奉仕体験活動を入れて実施するが、教員の確保や生徒の部活動や合宿参加等との調整が大変である。

項目(17)～(18)について

教育支援コーディネーターの活用に関しては、約3分の1の35.4%が活用しており、実施年度前の調査とほぼ同じである。担当者にとって、生徒を受け入れる事業所との打合せは大きな負担であるが、教育支援コーディネーターが入ってくると負担が軽減される。教育支援コーディネーターとの十分な打合せにより、体験や事前学習における各協力者からのガイダンスや各団体との細かな連絡などはかなりの部分をまかせることができる。

また、教育支援コーディネーターは生徒を受け入れる事業所が多くなると、事業所ごとの要求に合わせ、「奉仕」の授業をより効果的に実施するための具体的な手法の検討について必要な支援を行う。さらに、教育支援コーディネーターは、奉仕体験活動先の開拓担当である教科「奉仕」の担当者と副校長の事務負担を軽減する効果がある。特に体験学習の場所が多岐にわたっているところほどその傾向がある。

教育支援コーディネーターを活用していない理由としては、「地域での活動で活動場所が十分確保できているので必要ない」という学校が多い。

項目(19)について

教科「奉仕」を実施する上での課題は、次年度以降の指導内容の検討が29.5%と多い。「奉仕」の担当者は、当該年度の「奉仕」の計画と実施に苦心していて、次年度まで頭が回らないのが現状である。

また、教員の意識改革(25.0%)、校内体制の整備や活性化(22.7%)や進行管理(22.7%)も大きな課題となっている。教科「奉仕」を実施するにあたり、担当者と同様に副校長が大きな役割を果たしている

ことが分かる。

項目(20)～(23)について

教科「奉仕」を実施しての生徒や教員や地域や保護者の意識の変化では、一番意識の変化が大きいのは、80.0%と当事者である生徒である。次いで地域の評価で73.8%と大きい。目に見える形で活動を行っており、今まで小学校や中学校と違って、高校では地域との連携やつながりが希薄であっただけに生徒の意識の変化は大きい。

教員の変化も見られた。「地域に対する意識を持つ教員が増えた」とか、「ホームルームでの美化指導の徹底」が行われるようになったなどの報告もある一方で、「該当学年団や担当者だけでやっていてそれ以外は変わっていない」との報告もあった。

地域との関わりでは、「生徒が近隣の掃除を始めたということが分かり、好印象。学校もいい方向に変わり始めた」、「高校が身近になった。地域イベントに活気が出た」という報告があった。

保護者の意識の変化は判断が難しいが、学校への評価は高まったとするところが51%ある。

4 副校長の役割

学校の中で新しい組織を立ち上げたり、新しい方向性を打ち出したりするときには、副校長はリーダーシップを発揮して陣頭指揮をとる。それは教科「奉仕」についても同様である。

教科「奉仕」が軌道に乗るまでは、副校長は「導入時の先導的役割」を果たすとともに主幹教諭や担当教員を指導しながら、「方向性の確立と組織づくり」や「体験場所の確保」などを行う。そして教科「奉仕」が学校現場で動き始めると、実際の業務は担当部署や学年が行っていくが、副校長として関係諸機関との連絡調整や進行管理、評価法の原案作りなどの計画・立案の際の「相談役」としての役割を果たすことが重要である。

5 まとめ

教科「奉仕」の授業において、副校長の果たす役割の大きさが分かる。副校長は、前年度の説明会・連絡会の報告や各種の参考資料を基に、教科「奉仕」担当教員を指導するとともに、率先して授業の内容構築や連携先開拓などを行ってきた。この教科「奉仕」授業の発展は、今後も、副校長の手腕にかかっていると言っても過言ではない。

教育支援コーディネーターの活用は約35%であり、各校にはまだ十分に浸透していないのが現状で

ある。しかし、活用している高校からは高い評価を得ている。特に体験学習の場所が多岐にわたっている学校ほど評価は高い。導入時の苦労は少なからずあるものの、コーディネーターを活用することによって、メリットも大きくなることは確かである。

奉仕体験活動の実施場所については、5箇所以下が半数を占め、10箇所以下が8割になっている。学校の規模によって異なるが、第1学年200～300名とすると、数多くの場所に派遣することは難しく、メインを一箇所、サブを数箇所設けることが適切かと思われる。勿論、時間割や生徒を引率する教員数によるところも大きい。

最後に、都立高校が全国に先駆けて実践している教科「奉仕」の授業は始まったばかりであり、試行錯誤の面も大きく、いろいろな課題が出てくることは予想できる。副校長として、教科「奉仕」の授業における課題を解決し、2、3年の間に安定した教科・科目としていくことが大きな役割であろう。

6 質疑応答

質問者 藤原 成憲（向丘高校 全 副校長）

内容：教科「奉仕」実施上の課題について、具体例をおもちであれば教えていただきたい。

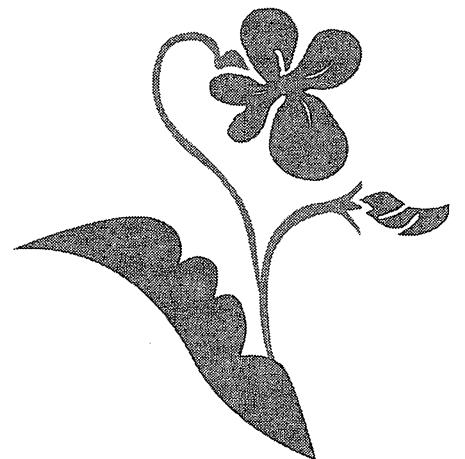
回答：①教員の意識改革については、担当者のみでなかなか広がっていかない、急に奉仕と言われても先生方の意識がなかなかそこまでいかないというのが現状である。②進行管理については、実例として本校の場合、昨年生徒320名が立川花火大会の後片付けを行った。今年も同様と思っていたが前日に大会の受付等に変っていたことがわかり、急遽変更してもらい昨年どおりに片付けを行った。これは、担当教師が拡大解釈をしてしまった結果であり、副校長が常に全体に目を配っていることが必要であると言える。また、終了が夜9時とか10時になるので進行管理に十分配慮することが重要である。

質問者 馬場 寿（山崎高校 全 副校長）

内容：生徒の安全管理の面で保険に入るとか安全確保の上でどうされているか。

回答：実施直前になって保険はどうするかということになったが、PTAの総合保険制度（入学時に3年間保障する保険に加入）で全て賄われ

ることがわかった。また、安全確保ということでは、夜間については結構気をつけることがある。ある程度の教員が動いてくれないと厳しい。人員確保ということでは、小グループに分かれるとこまめにやっていく必要がある。



魅力ある学校づくり

東部Bチーム副校長会

高校教育研究部第2委員会

提案者 都立市ヶ谷商業高等学校副校長 高橋 信雄

はじめに

東部Bチームでは、平成18、19年度と続く高校教育研究部第2委員会の研究の流れを受けて、「魅力ある学校づくり」というテーマですすめてきた。

各学校が置かれた条件がそれぞれ違うところでアンケートを実施しても、「魅力ある学校とは何なのか」、「学校ごとに違うだろう」という答えに当然なるだろうということでアンケート方式をとらないこととした。さらに「共通の魅力」という観点で話しを進めようかとも考えたが、やはり通り一遍の答えになるだろうと判断し、各学校がそれぞれの独自の状況の中で「魅力ある学校づくり」への取組、また副校長としてどのような努力・工夫をしているかについて、実践の報告を寄せていただいた。

1 進学指導重点校とスーパーサイエンス・ハイスクール指定を受けた学校(日比谷高校)

伝統校としての取組、特に自校入試問題作成、や土曜日の講習、100を超える夏季休業中の講習、45分7時間授業などの取組を行なっている。それらが他の学校に簡単に取り入れられるかと言うとそう簡単にはいけないと思います。そこに至る経緯の中で教員の苦勞、副校長の苦心は大変だったと拝察する。

2 中堅進学校としての取り組み(向丘高校)

中堅校としてどのように取り組んでいくのか。学校の特色とどう結び付けていくか、受験に力を入れていきたいというスタンスはあったとしても、生徒の実態と向き合ったとき、どのように取り組んでいったらよいかと考えさせられる。一つの方向として部活動の推進という手段をとっている。部活動を通して集中力と持続性・達成感を身に付けさせることに重点を置いている。学習活動では「基礎基本の充実」から着実に実績を積み重ねていくという、当たり前の結論に帰結される。

各学校の特色を明確にすることが難しい中で、取組についての具体的な研究が必要であり、中堅進学校が集まって研究会を進めていくことが必要である。

3 都立初の中高一貫高校の取組(白鷗高校)

私立の中高一貫校では5年間で中高のカリキュラムを終了させ、最後の一年で進学に対応をしているといわれているが、同校では6年目を「総合期」として位置付けており、そのカリキュラムの編成・実施について、興味あるところである。また、学校設定科目「社会と私」、「プレゼンテーション」、「日本文化概論」などを実施することで魅力ある学校づくりにつなげている。

4 校地狭隘校の取組(竹台高校)

校地が狭く、施設の的にも十分といえない条件から、部活動を推進していく方法や、人権尊重教育推進校の指定を受けることで独自性や特色化を打ち出している。与えられた条件が厳しくても、生徒の活動の場の確保、近隣へのアピール、当たり前のことを確実に実行できる生徒の育成を目指して取り組んでいる。

5 地域と共に歩む学校の取組(荒川商業高校)

隣接する3区から70%以上が通学し、地域に根ざし、地域と共に歩む学校を目指している。

商業高校の場合、学習指導と生活指導、資格取得を進路指導に結び付けている。こうした学校の取組は保護者に非常に評判がよい。

同校の場合は商業科と情報処理科を統合して総合ビジネス科に改編し、5つの系列を用意して生徒の希望を活かす仕組みをとっている。また、平成18年度より文部科学省からの「目指せスペシャリストスーパー専門高校」に指定され、様々な取組がマスコミにも取り上げられている。

6 通学に便利な学校での取組(市ヶ谷商業高校)

本年度末で統合・閉校を迎える学校だが、魅力ある学校づくりというタイトルからは忸怩たる思いもあるが、これまでの取組を顧みて生徒・保護者だけでなくPRが足りなかったのか、生徒の頑張りをもっと広報していくべきであった。

7 工芸・デザインの専門校としての取組 (工芸高校)

創立100周年を迎えた学校として、設備拠点校また重点支援校の指定を受けて魅力を高めている。

まとめ

研究を進めていくと、様々な成果や課題が出てくるが、各学校で同じ取組を行っても成果や課題が様々であり、特色を打ち出すことが難しいということを改めて実感した。

学校が成果として得た進学実績や生徒の声などを紹介していくことが大切であり、常に学校が抱える課題を明らかにし、それをどう克服するのかを学校全体として考えていく。

平成9年度より都立高校改革が始まり、進学重点校、総合学科やチャレンジスクール、中高一貫教育など様々なタイプの学校が設置された。今回、我々のグループに所属する新しいタイプの学校での取組の一部を紹介した。

講評・指導

都立小平南高等学校長 田中 政美 先生

奉仕体験活動に対する講評・指導

私は教育課程部会に長くいてここ2年間委員長をやっていた関係で、例えば「奉仕」について校長協会でも研究を行いました。アンケートをとっての事例についてまとめ、校長の意見を集めて都教委に提言してきました。

まず、奉仕の方ですが、かつて2年間にわたって調査しました。新しい施策が起こった時に、学校の中でどのように推進していくかについては、副校長先生が陣頭指揮に立って教員をまとめていかなければならないと思います。

小平南高校は以前より地域プラットホーム事業を展開しており、小平市の福祉関係とはかなり密接な関係もできていました。組織の立ち上げから副校長先生が何から何まで大変だったろうなという気がします。

校長会も同様ですが、研究協議を行うということは自校だけでなく情報を集めることにあります。全体像を知ることと、どんな特長があるのかを知ることとは非常に大事なことだと思います。アンケートをとっても実態についてはなかなか出てこない。各校には昨年度の校長協会の資料があると思いますが、

どこでどんな実践を行ったかの事例もあります。また、校長の考える問題や課題について個別意見ではあるがのせてあります。それらを参考にさせていただいて、自校でどうするか決める際の参考にさせていただければと思います。

小平南高校では年間で奉仕体験活動が34グループ、最小で3名から、小平市の保育園、小学校、老人養護施設などで体験しました。実際、私も小学校へ引率しました。

一方、受け入れ先も大変なようで、中学校も職場体験が入っている。同じように高校でも入る。そのほかに大学でも教育課程で奉仕体験活動が入っているようです。大学生と本校の生徒が同時に体験を行っていました。実際には区や市で異なるとは思いますが、教育委員会と話し合い調整してやっていただければ手がかりになります。実際に組織を動かす中で、進行管理、安全確保のチェック、引率の人員の確保が大変ですが、教員の意識改革にも役に立つといった面もあるので、是非研究協議会の実践事例を参考に進めていってください。

「魅力ある学校づくり」への講評・指導

魅力ある学校づくりの方ですが、学校経営の研究会で教育課程の編成に関して携わってきました。

魅力ある学校と言いますのは、学校の評価というものには生徒保護者がその学校をどう評価するか、あるいは地域がどう評価するかということだと思いますが、その地域によって全く違うものです。

副校長先生方は学校の実務を動かしていく中心であると同時に、経営の一端も担うわけです。自分の任された学校をどううまく経営していくか、どういう風に生徒や保護者にアピールしていくかを常に考えていかなければならないと思います。是非経営の視点をもって職務にあたられることが必要だと思います。

自分の学校を魅力あるものにしていくかという視点として三つあると思います。

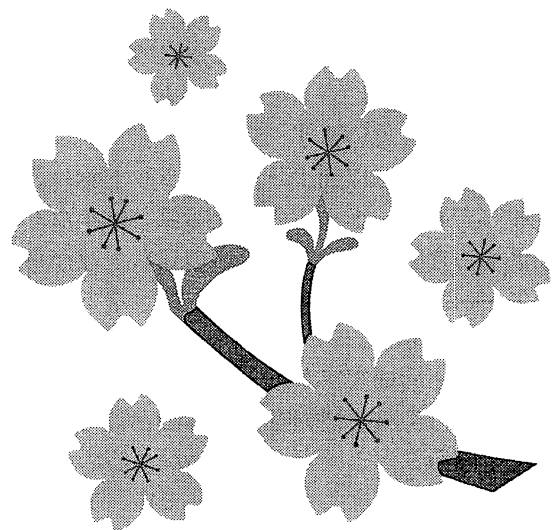
一つは教育課程であります。私は応募倍率を高めるために進学型にシフトしようと考えました。それまで後ろ倒しとなっていた学校から進学型にシフトしようと考え、総合を1、2年に、情報も1年に設置したり、選択科目を増やしたりもしました。教育課程をどうするかということはその学校がどう動いていくかを左右することになります。また、専門高校では小学科で残ったのはしっかりしたカリキュラムをもっていた学科でした。

二点目は生活指導だと思います。生活指導はしっかりしていなければならない。生活指導をしっかり行ったため学校の評判は上がりました。

最後に生徒が楽しくなければならぬということです。部活動をや学校行事の充実です。今、中学生が学校を決める一つの要素は部活動です。中学校では顧問の先生になり手がなくなっています。

部活動をやらない進学校はないと言えるのではないのでしょうか。部活動が活発でない学校は生徒指導上も大変なのではないのでしょうか。

もう一つ付け加えれば、出口（進路）が大切でしょう。そういうのを保護者、生徒は見ています。自分の学校を評価する観点となっています。



第三分科会

東部Dチームにおけるキャリア教育実践事例の紹介

－ キャリア教育推進における副校長の役割を考える －

東部Dチーム副校長会

生徒指導研究部第1委員会

提案者 都立科学技術高等学校副校長 佐々木 哲

I はじめに

東部Dチームは、都立高校30課程（全日制18課程、定時制12課程）から組織されている。毎回の副校長連絡会でテーマを設定し、情報交換をとおして、課題を明確にし、改善策を検討している。今回の発表の「キャリア教育について」も副校長連絡会で検討したテーマである。

31名の東部Dチームの副校長にキャリア教育についてアンケート調査を実施し、集計・分析した結果、2点の問題点が明確になった。

- 1 教職員間の共通理解と共通実践をどう運営していくか
- 2 キャリア教育の具体的な進め方をどのようにすればよいか

各学校でこの問題点を解決するために、課程や学科のバランスを考慮して5課程のキャリア教育の実践例を取り上げて、今後のキャリア教育のあり方を考察した。

II キャリア教育実践事例

1 都立科学技術高等学校 全日制課程

「スクールプラン（ダビンチプラン）の取組」

（1）特色ある取組

本校は大学進学型の専門高校であり、平成19年度は、66.5%が現役で理工系大学に進学し、19名が国公立大学に合格している。

生徒は、科学技術に関する理論や実験等を取り入れた学校設定科目「科学技術と人間」や「科学技術理論」等、特色ある科目を学び科学技術者としての基礎的学力を身に付けている。

学力向上を目指した特色ある取組「スクールライフプラン（ダビンチプラン）」がキャリア教育の核となり、学力向上に向けた様々な教育活動を展開している。

（2）学力向上を目指す教育活動事例

①スクールライフプラン（ダビンチプラン）

生徒が抱く自らの科学技術者像を到達目標とし、今の自分に何が必要かを考え実行する力、自己管理能力の育成がねらいである。

3年間をとおして、生徒自らの夢の実現に向けて教員が生徒の相談にのってすすめていく。このスクールプランを柱として生徒の進路実現を図る。

②週末課題（毎週末）・学習時間調査（毎日）

実施学年は、1～3年で、通年で実施している。家庭学習習慣の育成・基礎学習の向上と基本的生活習慣の育成・計画性の育成がねらいである。

③ドラゴンプロジェクト

実施学年は、1～3年で、通年で実施している。成績上位者の学力向上と家庭学習習慣の育成がねらいである。

④朝テスト

実施学年は、1～3年で、4月・9月・1月に実施している。基礎的な学力の向上・集中力の向上、基本的生活習慣の確立がねらいである。

⑤ホームルーム合宿

実施学年は、1年で、6月初旬に実施している。さらなる科学技術への興味をもつこと、研究所見学などによる職業観育成、本校入学の意思の確認及び大学見学により、近い将来への目的意識の向上がねらいである。

⑥言葉使いの教育

実施学年は1年で、9月に実施している。適切な言葉使いの育成、コミュニケーション力の育成、意思伝達の大切さを知ること及び大人としての言葉使い教育がねらいである。

（3）副校長の役割

校内の組織体制を確立し、各教員に対して役割を明確にして認識させるとともに、各教員が立場に応じて仕事をする体制を構築する。

教員との常日頃からのコミュニケーションをとおして実践する体制を構築する。

2 都立大江戸高等学校 定時制課程

「総合学科履修科目、チャレンジ指定科目の取組」

(1) 特色ある取組

本校は、定時制（三部制）・単位制・総合学科のチャレンジスクールで過去に不登校を経験した生徒が多い学校である。多様な生徒に対応するカリキュラムが作成されており、中でも総合学科の履修科目「産業社会と人間」や学校設定科目がキャリア教育の核になっている。

キャリア教育のねらいは次の3つである。

- ①己を知る
- ②社会を知る
- ③他者を知る

(2) 産業社会と人間とチャレンジ指定科目

①産業社会と人間

1年次で2単位履修する。自己の在り方・生き方を探求し発見することや現代社会のしくみとあらましを学び、職業観の育成と職業理解を図ることをねらいとしている。

②生活実践（奉仕・総合的な学習の時間）

1年次で1単位履修する。奉仕・体験的な学習を通して、日常的なマナーや一般常識、言語活動や情報活用能力など自立した社会生活に必要な知識や技能を学ぶことをねらいとする。

③地域理解

2年次で2単位履修する。

企業、事業所、公的施設、商店街等の実地見学・インターンシップ体験などを通して、勤労観・職業観を育成し、社会の一員として自立するという自覚を促すことをねらいとする。

④総合研究（総合的な学習の時間）

3年次で2単位履修する。福祉に関わる基本的な知識を身につけ、他者や社会に貢献することの喜びを知り、望ましい社会観を育成するとともに生徒の興味・関心、進路に応じて設定した課題について、研究活動を行い、自発的・創造的な学習態度を育てることをねらいとする。

⑤テーマ学習（総合的な学習の時間）

4年次で2単位履修する。生徒自ら設定した課題について知識や技能の深化、総合化を図り、問題解決能力を育成するとともに自己の将来の進路選択を含め人間としての在り方・生き方について考えさせる。

(3) 副校長の役割

教科「奉仕」の必修化に伴い、教育課程を変更した。常に教育課程の点検・改善を行う必要がある。

教員は専門教科だけではなく、学校設定科目についても指導する必要があるため、担当者同士での打合せが十分行える校内体制を確立する必要がある。

また、出口教育だけではなく、学校全体としてのキャリア教育へ誘導する組織体制を構築する役割もある。

3 都立第三商業高等学校 全日制課程

「2年次のインターンシップの取組」

(1) 特色ある取組

本校では、生徒の進路希望を100%保証するために、3年間を見通したキャリア教育を推進している。1年次では、「キャリアガイダンス」において、生徒自らの将来のあり方・生き方を検討させ、2年次で「インターンシップ」や「大学見学」等体験学習を実施し自分の進路を明確にし、3年次で三者面談等を通じて家庭と連携し、希望する進路の実現を図っている。

(2) 2年次インターンシップの取組

①インターンシップのねらい

- ・職業・勤労の持つ意義や役割などについての理解を図り、生き方や職業選択基準となる望ましい職業観や勤労観の育成をする。
- ・就業体験を通して、社会性を養う。
- ・具体的な職業についての理解を深め、自らの適性について考えると共に就職後の離職を未然に防ぐ。
- ・職業意識や進路意識を高め、日頃の学習の動機付けとする。
- ・日頃の学習の成果をインターンシップで発揮し、より専門性を高める。

②インターンシップの変遷

- ・平成15年度以前：課題研究（秘書検定講座）として3年生で実施していた。
- ・平成16年度：多くの生徒に体験させるために、流通系列の2年生で実施し、学年の半数の生徒が参加した。
- ・平成17年度以降：2学年の生徒全員参加の形で実施した。

③実施学年と実施期間

（平成18年から2学年全員で12月の2日間。平成20年度より11月の2日間に変更。）

④主な受入れ先

地域の商店街・大型商業施設・保育園・社会福祉法人・ホテル・物流会社等 63事業所

⑤指導体制

当初は課題研究で実施していたので、商業科と担当学年で企画運営していたが、平成18年から、2学年担任・進路指導部・商業科に加えて、継続的に実施するために、1学年担任と3学年担任がオブザーバーとして参加することになった。

平成20年度より、学校全体の取組として各分掌から担当者を選出して企画運営する指導体制ができた。

⑥事前・事後指導

・事前指導

5月 進路学習で仕事について知る。
進路学習を積み上げて、意識を高める。

7月 進路学習で職業調べ

8月 進路学習的な夏休みの課題

9月 インターンシップ学習の理解
体験学習先の決定・事業所の決定

10月 マナー指導・事業所調べ
受入れ先訪問・あいさつ・調査

11月 事前指導・インターンシップの実施
・事後指導

12月 ホームルームで報告書の作成し、発表
礼状を作成し、お礼の訪問

⑦成果と課題

受入先からのアンケート結果では、参加生徒の挨拶や作業態度、コミュニケーション能力において高い評価を得た。短期間ではあるが、販売補助体験を通して、仕事の大切さが理解できた。今後、生徒自らの進路を決定する際に役立った。マナーの大切さや人との接し方を体験できたことが成果である。

実施時期や実施期間の再検討や商業科目で学んだ知識・技能をいかしたインターンシップの実施及び生徒の進路希望に応じた実習先の開拓が課題である。

(3) 副校長の役割

実習先の開拓や各教員の役割分担を明確にして、教員とのコミュニケーションを密にとりながら指導助言し進行管理を行う。

4 都立葛西南高等学校 定時制課程

「4学年における具体的な進路決定指導の取組」

(1) 特色ある取組

社会でたくましく生き抜いていくための智恵と能力を身につけた生徒の育成をめざしている。

キャリア教育の指導の重点は、1・2年次は就業指導、3年次は進路情報の収集と検討、4年次は具体的な進路決定指導を重点としている。

また、ハローワークや地元商工会議所など地域との協力・連携を大切にしている。

(2) 定時制課程における1年間の進路指導

4月上旬 基本的には進学指導は担任、就職指導・情報提供は進路係が行うことを確認

4月中旬 4年生対象に進路希望調査の実施。

5月中旬 4年生対象に「進学・就職」に関する資料を作成し、ホームルームで担任より説明。様々な進路関係資料は各担任に回覧または写しの配布。

5月下旬 4年就職希望者と放課後、個人・グループ面談実施、就職活動の流れ・諸注意について確認、レディネステストの実施、自己の適性理解。

6月下旬 就職活動に関わる「人権教育」の実施、進路説明会実施案の作成。

7月上旬 進路ニュースの発行、4年就職希望者に7月下旬の合同就職説明会への参加勧誘、夏休みの就職活動についての諸注意の確認、一般常識問題等の問題配布。

7月中旬 進路説明会実施（全学年対象）
説明会終了後、4年就職希望者は個別面談の実施。

7月下旬 就職希望者に対する個別面談の実施。
求人票を検討後、会社見学。
～「面接の受け方」、「敬語の使い方」、「服装の注意」に関する資料を作成し、個別配布。

8月下旬 担任、副担任が志望動機、履歴書の書き方、面接質問対策等の個別指導を実施、面接練習及び進路未決定者の指導を3学期まで継続。

12月中旬 4年生対象に求職活動支援セミナーを開催

冬休み 4年生就職内定者に敬語の使い方についての課題を配布。

3月上旬 進路ニュースの発行。

3月中旬 1年生～3年生対象 進路説明会の実施。

(内容) 4年生就職内定者の代表による「就職

活動について」の報告。
企業の採用人事担当者より「企業が望む人材について」の講演。
進路指導関係者による「大学・短大・専門学校の選び方」の講演。

(3) 副校長の役割

外部人材の活用のために連携先へあいさつ等へ行くことが多く、渉外担当として日頃から外部とコミュニケーションを図っていくことが重要であるとともに、役割分担として仕事を明確化する。

5 都立本所高等学校 全日制課程

規範意識の確立を基盤とした「生き方教育」の取組

(1) 特色ある取組

平成15年度から実施している「茶髪ゼロ」指導が定着し、規律ある落ち着いた学校として規範意識の確立が本校のキャリア教育推進の基盤となっている。

(2) 内 容

平成16年度の卒業生のうち、大学を目指す浪人を除いた進路未決定者は約14%であり、この数値の削減が最大の課題の一つであった。

そのためには、出口教育ではなく「生き方教育」が必要であり、これをキャリア教育としてとらえて重視している。

キャリア教育年間指導計画として「S・Fプログラム[Self-Fulfillment(自己実現)プログラム]と名付けた指導計画を独自に作成し、総合的な学習の時間において各学年1単位設置するとともに、キャリア教育を3年間一貫指導している。

①キャリア教育の目標

- ア 生徒に自分の生き方を考えさせ、将来への目的意識をもたせる。
- イ 勤労観・職業観を育成する。
- ウ 体験学習を重視する。

②各学年の目標

- ア 1学年目標 「自己理解」
自分を知り、生き方を考えさせ、将来の目的意識をもたせる。
職業インタビュー・プロに聞く・職業調べ・職業発表会
- イ 2学年目標 「自己啓発」
勤労観・職業観を育成する。

インターンシップ全員実施・上級学校訪問
・大学の授業体験・小論文指導

ウ 3学年目標 「自己実現」

夢の実現、進路選択に向けて準備し、社会性や発表力を培う。

ビジネスマナー・卒論(テーマ設定したレポート)作成・発表会・未来予想図作成

③推進組織

校務分掌として、SF部というキャリア教育専任分掌を設置し、キャリア教育の計画・運営を行っている。毎週1回、分掌専任教員と各学年SF担当1名による会議を定例化し、年間計画に基づいて、指導案作成と授業における指導方法の意見交換等を実施している。指導計画を、企画調整会議にて毎回報告する。授業後の課題分析、評価・改善も、SF部を中心に行っている。

平成17年度から、「本所高&墨田区立中学(12校)キャリア教育ネットワーク」としてキャリア教育中高連携を始めた。平成19年度は2回の研究協議会を実施した。

今後は、成長段階に応じたキャリア教育とその意義を踏まえ、中高連携を深めていきたい。

(3) 成果と課題

①成果

平成17年度は、キャリア教育指導計画の下で学んだ生徒を卒業させる初めての年となった。平成17年度の卒業生のうち、大学進学を目指す浪人を除く進路未決定者は約4.6%、平成19年度は、1.3%となり、平成16年度14.0%より大幅に減少した。キャリア教育が、将来への目的意識の醸成、進路決定への推進力になった。

②課題

平成17年度は、3年間の指導計画を終えて評価を行い、平成18年度は、3学年について大幅な指導計画の内容変更を行い、ディベート等を取り入れて再構築した。

指導計画は「固定的」なものでなく、評価や生徒の実態に応じて改善する必要があると考える。

SF部を中心とした組織を活用し、今後も指導計画の改善・充実に努めていきたい。

III まとめ

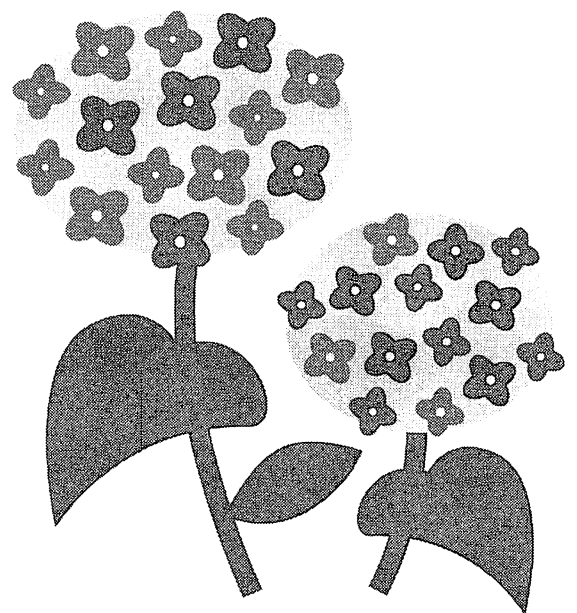
実践事例からは、生徒の実態や目指す学校像に応じた特色ある取組を通して、着実に生徒の進路希望の実現を果たそうと努力する副校長の姿が見えてき

た。

副校長がリーダーシップを発揮し、既存の人材を育て活用し、限られた人材を目標をもたせた上で組織化して、生徒や学校の実態に応じた取組を実施させることが重要な役割である。この一連のリーダーシップが副校長の役割と考えることができる。

<事例発表者>

都立大江戸高校	副校長	関 毅彦
都立第三商業高校	副校長	高石 光一
都立葛西南高校	副校長	高坂 仁
都立本所高校	副校長	白井 克昌



「小中高 夢のかけ橋推進事業」に果たす副校長の役割

西部Dチーム副校長会

生徒指導研究部第2委員会

都立拝島高等学校副校長

淵脇 英一

都立武蔵村山高等学校副校長

下田 賢明

I はじめに

生徒の変容に着目して、「小中高 夢のかけ橋推進事業」の成果を再確認し、事業を推進する当事者としての副校長の役割について考察を行った。

この事業のねらいは、次の2点にある。

- (1) 子供たちに異年齢交流の機会を増やすとともに社会性や協働性、思いやりの心や豊かな人間性の育成を図ること。
- (2) 「開かれた学校づくり」を進めることで、都民からの公立学校全体に対する理解を深め、信頼を高めること。

以下の2つを中心として実施状況の整理を行った。

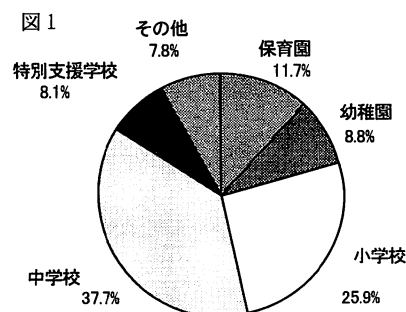
- ①「平成19年度『小中高 夢のかけ橋推進事業』推進月間に関する調査結果」
- ②「小中高 夢のかけ橋推進事業」連携推進校の実践事例の報告 {西部D副校長会の中の7校}

II 「小中高 夢のかけ橋推進事業」実施状況

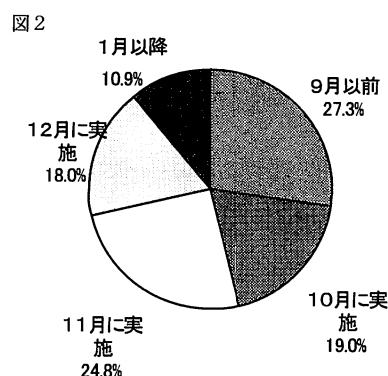
1 平成19年度『小中高 夢のかけ橋推進事業』推進月間に関する調査結果から

- (1) 取組の実施状況 98.4%が実施しており、ほぼ全校で実施している。

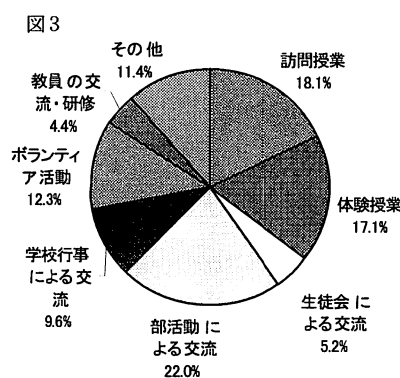
(2) 活動連携先状況 (図1)



(3) 活動時期 (図2)



(4) 活動内容 (図3)



(5) 取組の成果と課題

①成果

- ・高校生は、授業で身に付けた知識や技術が生かされたので自信をもった。
- ・小中高の生徒間の相互理解が深まり、相手を思いやる気持ちができた。
- ・参加した中学生が、高校に対する興味・関心を深めた。

②課題

- ・参加した児童・生徒の安全対策。
- ・小中学校などのニーズを踏まえた活動にするための情報収集の方法。

2 実践事例（都立武蔵村山高等学校）

（1） 学校経営計画における位置づけ （目指す学校）

地域社会の教育力を取り入れて、本校の教育活動の充実を図るとともに、本校のもつ施設・設備・人的財産を地域に提供し、地域社会と連携した学校教育を推進する。

（目標と方策）

地域の小中学校との連携を深め、地域に根ざす学校づくりを行い、それらを通して、学校や地域社会への帰属意識を高める。

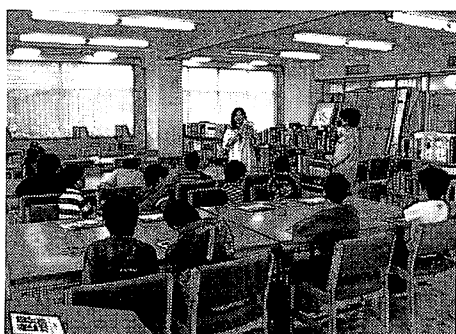
平成16年度～18年度重点支援校「地域から信頼される学校」

（2）主な交流活動

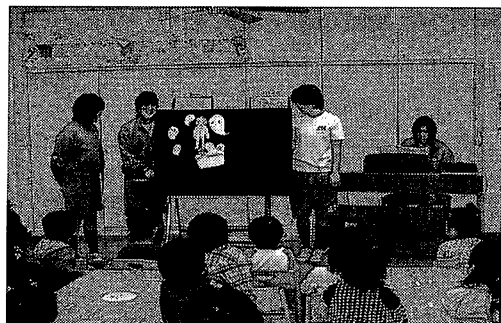
- ①小学校との交流 特別授業（「八小講座」）への補助教員としての参加、小学生社会科見学
- ②保育園、福祉保育園、療育病院での実習授業（各々年2回）、特別支援学校への訪問（年2回）
- ③近隣小中学校との合同音楽会
- ④部活動生徒の小学校行事、地域行事への参加
- ⑤部活動交流
- ⑥出前授業、学校行事（学校説明会等）への参加
- ⑦地域教育協議会への参加（保育園・幼稚園、小中学校関係者、及び地域住民の方々と構成）

（3）実践例

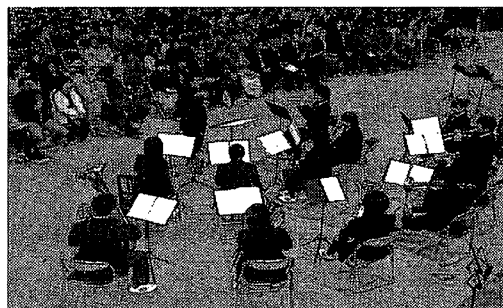
①小学校社会科見学



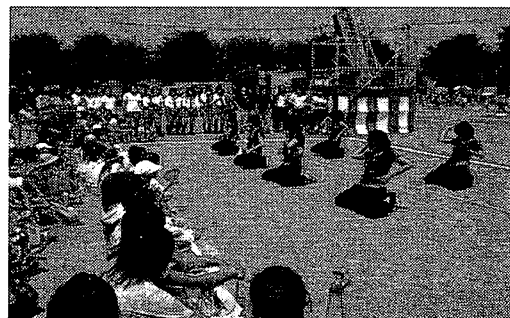
②保育園実習



③合同音楽祭



④ 小学校夏祭り



⑤部活動交流



（4）成果

- 1 体験学習を行うことで生徒の規範意識の向上がみられた。また、保育園児・小中学生との交流は、活動を通して、生徒の進路選択の動機付けにもなった。
- 2 合同演奏会や小学校行事等地域住民や子供たちの前での演奏や公演は、地域の高校生としての自覚を芽生えさせた。
- 3 部活動において、中学生と一緒に練習することにより、その後の部活動に自覚をもって参加するようになった。
- 4 地域の行事や教育活動へ参加することで生徒の健全育成に地域の人たちからの協力を得られるとともに、生徒たちに地域との交流の大切さを理解させることができた。
- 5 地域の安全対策の連携を整えることができた。
- 6 本校の様子を地域の小中学校に知らせることができた。

III まとめ

1 「小中高 夢のかけ橋推進事業」の成果と課題

(1) 生徒の育成

生徒は、交流事業を通して自らの知識・技術を活かすことができた成功体験から、大いに自信をもった。さらに、相手を思いやる気持ちが深まるとともに、積極的に取組む姿勢を示すようになっていく。

また、課題としては、安全対策や連携先のニーズを踏まえた活動にするための情報収集が挙げられる。生徒の成功体験を引き出すために重要なポイントとして、連携先との連絡や調整が重要である。

(2) 「開かれた学校づくり」

出前授業を行うことで、高校の様子を小中学生に伝えることができ、かつ、高校教員の中学生に対する生徒理解を深めることができる。

また、中高教員が相互に研究授業・研究協議を行うことで、指導内容への理解が深まり、都立高校への理解を深めることにもつながっている。

一方、課題としては(1)でも取り上げた連携先との日程調整、事前の打合せ等、準備に時間がかかること、本事業の計画・実施・評価が組織的な取組になっていないことが挙げられている。

2 副校長の役割

(1) 校内組織体制の確立

事業の立ち上げにあたって、意欲と指導力のある教員の努力や小中学校の教員とのネットワークに頼って、事業を進めることは現実的な選択ではある。しかし、その教員が異動になれば、活動が停滞してしまう。こうした問題への解決策は、推進事業を学校の組織としての取組とすることに尽きる。ここに、副校長の果たすべき役割がある。

まず、成果を校内に周知し、生徒と教員の変容を広める。教員の興味を喚起し、個人の取組を教科や分掌・プロジェクトチームの実践に移していく。生徒会や部活動であれば生活指導部、訪問授業・体験活動であれば教務部に、主幹教諭・主任を統括者として関与させて分掌の仕事としていく方向に、推進すべきである。

副校長が担う学校外との連絡調整の場に、主幹教諭・主任、プロジェクトリーダーを参加させて、経営参画意識を高めると同時に、主幹教諭・主任層と連携先とのネットワークをつくることで、組

織の取組として事業に継続性をもたせることができる。

(2) コーディネーターとしての役割

副校長は、生徒の得意とする活動や教員の能力が生かせる場がないか、小中学校や連携先候補が望んでいる活動は何かなど、常に情報の発信と収集の中心として行動することが重要である。

また、保護者から小中学校の情報を得たり、学校運営連絡協議会委員として地域の情報を得たりするなど、学校外とのつながりを生かした情報の集約の要となることで、学校の内外を結ぶコーディネーターとしての役割を果たすことができる。さらに、副校長は地域新聞などのメディアに積極的に情報発信を行い、活動の成果を広く広報することで、生徒や教員の自信を深めさせ、意欲を引き出していくこともできるやりがいのある職である。

副校長は学校の窓口としての連絡・調整や校務の進行管理を行いながら、主幹教諭・主任から学校外のニーズと学校内の活動を結び付けた活動が行われるようにかかわらせ、一段高い視点から行動する意識が求められる。

IV おわりに

連携先との日程調整・安全面への配慮など、実施上の課題は多い。また、「奉仕」体験活動と重複する活動との調整もあるが、成果が確実に生徒に還元できる事業であることに間違いはない。

副校長として本事業の取組を進め、思いやりの心や人間性豊かな生徒の育成と「開かれた学校づくり」をさらに進めるために、確実に役割を果たしていきたい。

本研究にあたり、教育庁指導部高等学校教育指導課の担当の方々には資料利用の許可並びに貴重な指導助言をいただきましたことを感謝申し上げます。

<参考資料>

- 1 「平成19年度『小中高 夢のかけ橋推進事業』推進月間に関する調査結果について」（平成20年2月25日付 19教指高第385号）
- 2 「小中高 夢のかけ橋推進事業」都教育委員会ホームページ
<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/sidou/19yumeakehashi.htm>

指導・講評

警視庁警察学校教官 前立川高等学校長

大澤 充二 先生

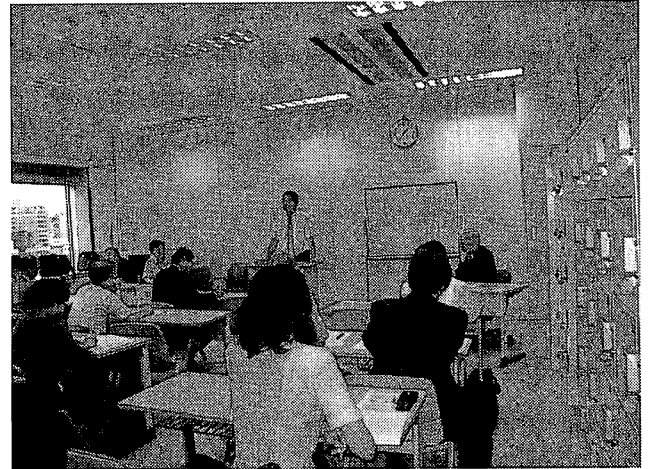
学校を離れて、校長先生、副校長先生方のお仕事がどんなに大変なお仕事かということを痛感しています。お忙しい先生方が、激務の中で今日の発表に向けてそれぞれ努力されたこと、今日発表の先生を含め敬意を表したいと思います。

まず、キャリア教育について5つの学校の実践事例の紹介がありましたが、それぞれの学校の生徒、学校・学科などの実態を踏まえた特色ある実践になっていたと思います。本所高校の大学浪人をのぞく進路未決定者の数値削減の課題について4年間で大幅減少の画期的な数字が出ており、出口教育ではない生き方教育としてのSFプログラムについてもっと聞きたかったと思います。

8月上旬の新聞に、ある民間の調査研究機関が全国の高校生を対象としたアンケートについての記事がありました。将来就きたい仕事を考えている、考えていないという2つのグループで数値を比較したところ、日常の授業や学習への意欲で、将来就きたい仕事を考えている生徒の群の方が各項目で20から30ポイント高かったという結果で、その調査研究機関では、将来の仕事イメージすることがこれほど学習意欲に結びつくとは驚き、キャリア教育は就職だけではなく、進学を目指す生徒にも大切と締め括られていました。

それぞれの学校が単なるキャリア教育として終わらせるのではなくて、授業・学習・学校生活全体にそれを還元していくという視点が明確になった実践事例だったと受け止めました。

2つ目は、小中高夢のかけ橋について、武蔵村山高校の発表をはじめ、7校の事例が冊子には紹介されています。各学校とも、この事業のねらいとする社会性や協同性、思いやりの心を育てるという点で、この事業のねらい、意義を達成しているという気がします。例の秋葉原事件が発生した後、いろいろな新聞が取り上げましたが、ある投稿記事に、マザーテレサの話がありました。「愛の反対語は？」と問いかけられた多くの人たちが憎悪、憎しみと答えたそうですが、マザーテレサは愛の反対語は無関心であることと穏やかに語った。そして秋葉原の事件とも関連させながら、無関心であること、そして無視されること、これははとてつらくさみしいことなんだ。若者よ、自分に他人に社会に関心をもとうとその投稿記事がまとめられていました。まさに、



この小中高夢のかけ橋推進事業は、小学生、中学生との関わりを通して、自分や他人、社会に関心を持ち、豊かな心をはぐくんでいくというねらいの達成という点で、それぞれの学校の事例は、高く評価をきるのではないかと考えています。

さて、私は、4月から警視庁の警察学校の非常勤職員として勤務しております。先日テレビで、ある高校の職場体験が放映されており、ある県の最寄りの警察署、警察学校で体験をした子どもが、「思っていた通り警察はかっこよかった。警察官になりたい気持ちがいっそう強まった。」とインタビューで答えていました。私はそれを聞いて、かっこよい、君の考えはちょっと違うぞと感じました。警察学校では、この8月の炎天下、機動隊用の制服に身を包み、盾も持った訓練、たぶん訓練生の体の中は塩を吹いているのではないかなという非常に厳しい訓練を展開しています。警察学校は全寮制で、たとえば高校を卒業して巡査になる場合は、10ヶ月の訓練、5ヶ月の職場実習を終えて、さらに3ヶ月間全寮制で生活をします。

様々な職業体験を通して、将来のこと、仕事に対して夢を与えたり、夢をもったりすることは大切だと思いますが、一方では先ほどのインタビューのように、ひょっとしたらこの生徒にとってその日の警察署や警察学校の職場訪問、職場体験は、職業そのものに対する誤解を増幅させてしまったことになってはいないだろうかと感じました。職場見学とか訪問、体験的な活動がキャリア教育の意義を本当に果たしているのだろうか、実態とずれた職業観をもつとしたならば、果たして・・・ということを感じました。働くことの実態から乖離したうわべだけの形だけの諸活動といったものがないと言い切れるのかなとも感じました。

キャリア教育の話に偏るかもしれませんが、福岡

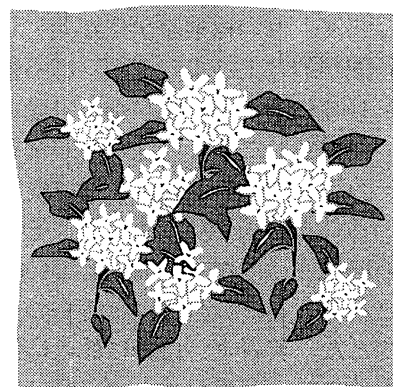
県のある中学校での事例です。キャリア教育に関して文部科学省では4能力8技能を指摘しており、4能力として人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力を挙げています。その中学校ではこの4つの能力にプラスして、キャリア教育の中ではぐくむ力として「忍耐力」を育成すると考えています。職業体験学習等の中で、自分とぴったりに合う職業を見つけるということは、大人でもとてもむずかしいことです。私も37年間の生活を振り返って、自分が果たして教員に向いていたのか、私が教員を続けたことがかかわった多くの生徒に本当に良かったのかと常に悩み考え続けていました。つまり、自分に合わない、なかなか思うようにいかない、その仕事の中で周囲の人と協調して切磋琢磨する中で人間としての力がついていくと考えた場合には、忍耐力じっと我慢する心これを育てることもキャリア教育の大きな柱だとその中学校では位置付けている。そのため、授業、教科外の活動、教育活動全体を通して、そのじっと耐える心、これを学校全体として育てていくということを目にして、あっ、このことは副校長先生方の役割を示唆しているのではないかなと思いました。今、様々な領域の教育、そして諸事業が次から次へと学校に要請として求められています。その中で、まず、副校長先生方の役割の一つは、これら様々な領域の教育や諸事業を単発的にとらえて平面的に羅列し、消化するだけではなく、学校教育全体の中で位置付ける、こういう形でこの事業、教育は学校教育全体の中から位置付けているということを、生徒や保護者ととりわけ先生方に意識化させることだろうと思います。

2つ目は、これら様々な教育や事業を、生徒の実態や実施課題などを踏まえながら、その指導内容や指導計画等を加除修正していく方向性を副校長先生方が先生方に示すということではないかと思えます。たとえば、さきほどの中学校の場合は、生徒の実態を踏まえて、文科省が示した4つの能力プラスうちの子供たちにとってはこれだという具合に加えています。場合によっては除く、修正する、生徒の実態や課題等を踏まえた指導計画、指導内容についてこれからの方向性を示す。

そして最後に、様々な領域の教育や諸事業、ねらい内容等がずいぶん重複するものがあります。先ほど奉仕体験活動との重なりを示しました。キャリア教育これはニート、フリーター、就職してすぐ離職という深刻な問題を前提として今大きくクローズアップされている教育ではありますが、基本的には進

路指導全体の中で位置付けるべきものです。進路指導とキャリア教育を切り離すのではなくて、進路指導全体の中でのキャリア教育、そして進路指導を深化、統合、発展させる場としてのホームルーム活動との絡み合い、また文科省があげているキャリア教育の内容としてボランティアや学校間の連携、これはまさに夢のかけ橋推進事業と重なります。これを思い切って整理・統合していかないと、肝心の授業、事業はどっかに吹っ飛んでしまう。それ以前の段階で副校長先生やや先生方が疲労困憊してしまうという現実はあるのではないか。私は立川高等学校では無理なく無駄なくやろうよ、学校の根っこは授業だよと言ってきました。そのためには整理・統合するという視点も今後必要なのではないか。都教委も諸事業をもう一回とらえ直していく方向性が必要だろうし、それに対して校長会や副校長会が議論の場で学校現場の状況を伝えていく、そして都教委とともに考えていくということも必要ではないかと考えています。

都立高校と先生方のご健勝ご発展を陰ながらお祈りしています。今日はどうもありがとうございました。



第四分科会

学校経営計画の策定と運用に関する実態調査

定時制通信制副校長会中部研究委員会

提案者 都立新宿高等学校副校長 真保 俊哉

I はじめに

平成19年度に都立小石川工業高校定時制の橘田進副校長が全定副校長全員にアンケート調査を依頼し、とりまとめたものを、今年度は新宿高校真保が発表した。

この研究の主旨は、平成15年度から学校経営計画が導入され、平成17年度には学校経営計画策定の留意点が示された。

そこには、学校経営計画は、校長が学校の児童・生徒の実態と課題に応じて、教職員相互の共通理解と取組の方向性を明確にするものであり、校長の判断で作成されるということ、さらに、計画は公表を前提としたものであり、都民の目から見て学校の課題や取組の内容が分かり難いものや、一連の計画の流れや関連性が不十分なものもあるため、作成に当たっての従来からの基本的、平準的な考え方が一定の指針として示されている。

今後の学校経営計画の策定や運用に活かすために、学校経営計画の策定方法や運用の状況、全定における学校経営計画の推進にあたって発生する課題を検討した。

調査方法は、TAIMS を利用してアンケート調査を実施し、回収率は全日制 183 課程中 63 課程の 34.4%、定時制 94 課程中の 39 課程の 41.5%、全定併せると、36.8%であった。

II 調査結果

問1の、「学校経営計画を策定する組織について」は全日制では19%、定時制は5.1%の学校が「組織がある」と回答しており、全日制の方が組織的な取組がなされていることが分かった。策定する組織がないとした学校が8割以上（定時制では9割以上）あり、設置されていない現状の把握ができた。また、「策定する組織がある」と回答した中で、組織の名称としては、企画調整会議という回答が最も多く、他にも主幹会議などの回答もあった。

問2の、「学校経営計画の策定への参画について」に対しては、副校長の関与が全日制 81.1%、定時制が 93.9%で定時制の方が高いという結果であっ

た。

問3及び問4の、「学校経営報告を策定する組織名と参画について」に対しては、全日制では、経営計画の策定よりも、組織的に検討されていない現状であった。

問5の、「学校経営計画および学校経営報告の周知とその方法について」は、教職員への周知の他、ホームページや学校要覧への掲載や、学校運営連絡協議会での配布は9割に達していた。一方、生徒や保護者への配布が少ないという現状が把握できた。

問6の、「保護者に対する学校経営計画および学校経営報告の説明会の実施について」という問いに対しては、定時制の 23.1%、全日制では 46%が実施しており、全体では 37.3%の学校で説明会が行われているという回答であった。

問7の、「学校経営計画を策定から公表までの手順について」の質問では、

『校長作成→企画調整会議→起案決定→職員会議→教育委員会→公表』とする手順が33.7%と最も多かった。次いで、起案決定と職員会議が入れ替わったものが28.4%であった。これらの回答で6割を超えているが、校長作成後に起案決定する学校も27.4%占めている。

問8は、「学校経営計画に係わり、学校全体のPDCAサイクルの実施期間について」たずねているが、約半数が「年1回」であり、「半期に1回」、「学期に1回」、「行事毎」という回答が続いた。

問9では、「学校経営計画の各課題に対応するPDCAサイクルの実施時期が学校経営計画に明記されているか」という問いに対しては、9割近い学校は学校経営計画に明記されていないと答えている。

問10の「管理職の学校経営計画の進行管理について」という問いに対して、「年3回実施する自己申告に基づく面接時に行っている」との回答が約8割と最も多く、次いで「適宜」や、「定期的」という回答がそれぞれ約4分の1であった。本問は複数回答が可能な形であり、自己申告の3回に加えて「適宜」という場合も見られた。

問11は、今までの観点とは異なり「学校経営計

画の策定に関する管理職の研修は充分であるか」について、62%弱が「十分ではない」と回答している。残りの39%が「経験により身に付く」または、「研修が十分である」と回答している。

問12では、『学校評価』について、学校評価項目を策定する組織について」という質問に、66.7%が「ある」と回答しており、策定する組織として学校運営連絡協議会の評価委員会を挙げている。

問13の『学校評価』における、学校評価項目の策定には誰が参画しているか」という問いには、最も多いのは副校長、ついで校長、主幹教諭、経営企画課(室)長と続き、評価委員会は25.6%であった。

問14の「前年度の学校評価結果の次年度の学校経営計画への反映について」という質問については、7割から8割反映していると回答した学校が最も多く、5割以上と回答した学校と合わせて89%と高率であった。

問15での「学校行事ごとの教員や保護者などの参加者に課題を把握するアンケートの実施について」の問いでは、管理職が行うだけではなくて分掌等が行う場合も含め、約4分の3の学校が実施しているという回答であった。

問16の「学校経営計画の推進を阻害する最大の要因について」の問いに対しては、「教職員のリーダー層の不在」を挙げる学校が最も多く56.3%であった(研究集録の51ページ問16の円グラフの数値は誤りで本文中の数値は正しい)。また、本問に対する回答で「その他」が約2割を占めた。自由記述として「教職員の意欲や意識の希薄さ」に原因があるとあった。定時制においては「リーダー層の不在」という回答は全日制よりも高く、61.1%に達した。

問17の「学校経営計画により学校改善を促進する最大の要因について」という質問では、①協調性、②自律性、③実験(革新)性を選択肢として示して回答を求めた。それぞれの項目には次のような内容の補足を示した。すなわち、①では、「同僚性、雰囲気、コミュニケーション、相互関係、組織的な取組など」②については、「教職の専門性、仕事の明確化、役割分担、責任など」③には、「意欲、慣行からの離脱、計画―実施―評価のサイクルなど」であった。その結果、協調性を挙げている学校が、全日制では47.6%と最も多く、定時制では実験(革新)性が44.7%で最大となっている。その他の記述としては、「目標の明確化」が2校あった。

問18では「学校経営計画の推進のために最も改善に取り組んでいるものについて」を質問し、①教

育課程の改革、②組織体制作り、③リーダー層の育成、④若い教員の育成、⑤校内研修の活性化、⑥授業の改善、⑦家庭・地域社会との連携、⑧その他、の7選択肢から回答を求めた。その中では「組織体制作り」が45.2%と最も多かった。次に「リーダー層の育成」、「授業改善」と続くが、定時制だけで見ると、最も多い回答は「組織体制作り」で全日制と同様であるが、以下「授業改善」、「リーダー層の育成」の順となり、全定での違いが確認できる。また、問16の「学校経営計画を困難にさせるもの」で最も多い「リーダー層の不在」が、学校別の回答では22校であり、問18の「リーダー層の育成」を挙げた学校は3校に留まっていることは、気になる点である。また、自由記述欄で「教職員の意識改革」との指摘が2校あった。

問19の「学校経営計画の年度途中での変更・修正について」の問いでは、95%の学校で年度途中には変更や修正を行っていないという結果であった。

最後に問20で「今年度の学校経営計画の策定と運用を、①学校教育目標、②学校の内部組織とその運営、③教職員と役割分担、④学校の全体的な雰囲気」の4項目についての5段階評価」を尋ねた。

その結果、①が3.9と最も高い評価であり、順に②が3.8、④が3.6、③は低い3.5と最も低い評価であった。

III 考察

アンケート結果から、学校経営計画や学校経営報告の策定は、校長および副校長が策定し、策定後に企画調整会議や職員会議で報告するとした学校が57.9%と半数以上であった。

学校経営計画を実現していく中で、改善を促す要因としては、全日制では「協調性」という意見が多かった。これは、職員数が多く、課題に対して組織的に取組むことが求められるとともに、コミュニケーションを図ることが重要になっており、協調性が最も大事となる。

一方、定時制では、職員数が少ないこともあり、協調性よりも計画―実施―評価のサイクルを通して、教育活動の確認を行うことが、改善を促す要因となっている。さらに、学校改善を推進していくための重要なポイントとして、全日制ではリーダー層の育成、定時制では授業改善に力を注ぐことであるがわかった。これは、職員数の多い全日制は、キーポジションにリーダー層を適切に配置することにより計画が推進され、定時制では職員数が少ないため、副

校長がリーダーとなり、個々の教員の授業改善を中心に経営計画を推進していると考えられる。

この調査結果全体から、学校の全体的な傾向把握できることは貴重だと思います。例えば、学校経営計画を保護者や生徒に配布している学校があるということも大事な点である。それぞれの学校がどの様に学校経営計画を推進していくかは、我々副校長の職務として求められており、大いに参考になったのではないかと思います。

最後に、全日制副校長の協力により、定時制の状況がより明確になったと考えられ、今後、学校経営計画をより充実したものにするため、教職員の組織的な対応の推進と、実践的な研究の継続が必要である。

本調査は、年度末の多忙な時期に依頼したこともあり、決して回収率が高いとは言えないが、一定の方向性や傾向を掴むことができた。くり返しとなるが、前年度担当された橋田先生に改めて御礼を申し上げるしだいである。

質疑応答

(問) 台東商業高校 小山

学校経営計画を作成するにあたり、校長先生の立場として、学校運営の図式としてトップダウン型とボトムアップ型があると思うが、この調査の結果からは、どちらのタイプの学校経営計画の作成の傾向が強いとかは分かりましたか？

(答) 新宿高校 真保

問い1などとも関連しますが、この調査では、作成する組織があるか否か、誰が参画して作成しているのかを主に聞いているので、ご質問のように、その組織がどのように機能しているかについては、把握できていません。また、企画調整会議そのものについても、その学校の有り様によって様々あると考えられますので、大事なことは、冒頭で申し上げたとおり、本来は指針としては、校長の判断で策定するものであるとなっているわけですが、そうはいっても、教職員の理解と協力がないと浸透していかないわけですから、副校長の立場として、校長が思い描く学校経営の構想をどういう風に、各教員に浸透させるか、また、教員の考えていることをどのように校長に伝えて反映させて、教員のやる気を起こさせるかは、日頃から頭を悩ませている大事な内容だと思いますが、今回の調査では示されていません。また、問7に、学校経営計画策定後、先に教育委員

会に報告して、校内に伝えるという方法はトップダウン型といえるかも知れませんが、それが少ないということは、職員のやる気を受け止めつつやっていると思われますが如何でしょうか。

講評・助言

東京都立一橋高等学校長 寶槻 広 先生

私は定時制に4年間教頭として関わった経験があり、驚きの連続で終わったという印象を持っている。当時の教頭会では、5つあったと思われる研究会の「第4研」に所属し、新高校像を様々研究をしていた。それは、自由な発想で新しい高校像を自分たちで描けば良いのだと言われ、その時の研究が様々活かされつつあるところではないかと思います。

特に、現在勤務している一橋高校は、昼夜間定時制で、その時の研究したことが役立っているという実感がある。研究を進めていくということは大切であるので、校長・副校長共に研究意欲が低下しないようにすることが、今後の課題だと思います。今回の研究は、私自身参考にもなり、何よりも全定を絡めた研究を実践されたことは、有意義で良い試みだったと思います。

さて、本題ですが、研究の主旨の中で述べられている、「学校経営計画の策定の留意点」のところですが、その文言が、「(～省略～) 本来校長の判断で作成されるべきものです」と集録には書いてありますが、「(～省略～) 本来校長の判断で作成されるべきものではありません」と記載されているはずですが。

次に問1の、「組織がありますか？」ということですが、組織化して作れとは留意点には特に書いてないわけですので、質問の意図が分かりかねますが、組織でやっている学校は少ないということです。そこで質問にもありましたが、ボトムアップ型かトップダウン型かということですが、現在の校長は、上手くミックスしながらやっているのではないのでしょうか。

問7での「学校経営計画の発表までの手順」は、校長の個性が発揮しやすいところで、歴史の新しい学校では比較的トップダウン型が多いのではないかと思いますし、逆に伝統校ではボトムアップ型になることが多いのではないかと思います。特に赴任したばかりの校長は、その学校のことが分かりませんので、問2にあるように、副校長先生の参画が多くなるのはやむを得ないと思いますし、実態に即したことであると思いました。

問5の「周知はどうしているか」ですが、私は、

生徒に向けて始業式や学年集会などの機会を利用して説明をしています。

問 8 の「サイクルはどれ位か」ですが、なかなか計画的に行うことは難しいと実感しております。それは、やはり時間的な余裕がないというのが大きな理由になっていると思います。年 1 回はきちんと総括をして、日頃の進行管理をしっかりやるようにという話しになるとと思います。

問 10 で「進行管理をどの様に管理職は行っているか」を聞いていますが、自己申告に伴う面接の時に、分掌業務等組織的なことを聞くことは難しいと感じています。

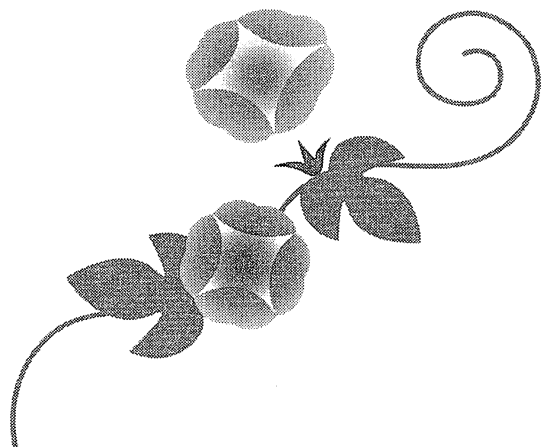
問 11 の「学校経営計画策定の研修」ですが、策定に関する研修は、校長着任後は特になく、任用前研修で実施しました。副校長先生が関与することも多く、副校長先生の研修にも含まれて良いと思いました。

問 12 と 13 の「学校評価」ですが、学校評価の定義について明確にした質問とした方が良かったのではないかと思います。

問 16 の結果である、「リーダー層の不足」が今の学校の大きな課題であります。ミドルマネジメントを担う主幹教諭・主任層を育てなければならない状況だと思っています。

問 17 の「学校改善の要因」の分析では、全日制、定時制いずれも学校を動かす要因になるとと思います。分析結果の考察において、定時制では、計画－実施－評価を絶えず行うことが学校改善を促す要因としていますが、そのように単純に結論づける要素が読取ることができなかった。

結びに、これからの定時制の教育を考えるに当たり、校長会でも現在調査を進めているところですが、新しいタイプの定時制の学校が多く生まれ、昼夜間定時制の夜の部分と夜間定時制の共存の問題や、本来の勤労青少年の姿である昼間働く生徒数がごく少数であることなど課題が多く、これらの課題を解決し、今後のあり方を検討していく必要があると思います。今日のご苦勞様でした



講 話



「笑いこそ必要」

六代目 春風亭柳朝 師匠

みなさんこんにちは、ありがとうございます。先程玉井先生の方からご紹介ありました落語家、噺家でありまして、こういった教育関係で落語家がお喋りをするのは結構多ございます。先程、河合塾という話もございましたけども、この夏休み期間中は小中学生に落語子供講座なんて、私も地元の大田区の大森の方で教室を開いております。今、落語ブームで、昭和30年代以来のブームが来ておりまして、ほんとの腹から声を出して自分の言葉で語るといふ、こういう機会がございます。

先だって東京の高田馬場でございます、某有名私立大学でございます。あまり名前は言いたくないんですけど、居酒屋かなんかで、たぶん自分の校歌を自慢したいんでしょうね。「早稲田、早稲田、早稲田、早稲田、早稲田、早稲田、予備校」予備校かよ、なんていう、そんなところでお喋りいたしません。文学部でございました。AV 教室という、聞いただけで卑猥なイメージをする教室で、今日よりもっと多いですよ。五百人くらいの生徒さんを前に致しまして、ピンマイクを付けまして今日のような立ち高座でございました。去年の今頃でしたので目黒のサンマという有名な古典落語を披露いたしましてね、終わった後に質疑応答。一番前に座っていたのが法学部のモグリの学生さんだと思うんですけども、「質問です。柳朝師匠がさっき落語の本題に入る前に、首を振りながら世間話をする・・枕っておっしゃるんですか、あの中で与太郎って言葉おっしゃってましたけど、与太郎ってどういう意味ですか。」て聞かれましたね・・・、「お前のことだよ」って言いたくなりました。大変でございます。そんなところでいろいろお喋りさせていただいておりまして、やっぱり言葉というのは難しいですね。みなさん方も教頭先生、今は副校長とおっしゃるんでございましょうか。やはり生徒さん方とコミュニケーションを図る。難しいですね、実は我々噺家もそうなんです、この出囃子になりますと、こうずーと出てきまして、座布団の上に正座をして、お辞儀をして瞬時に今日のお客様はどういうお客様なのかな、お客様の顔を見ながら今日は何をしゃべろうかな、いろいろ頭の中の引き出しで整理をするわけですね。例えばお目の不自由な方がいらっしゃったら、これは盲人の出てる話はできないな。あるいは、おみ足の悪いお客様がいらっしゃったら旅の話は出来ないな。こういうのを一応気を遣いながらおしゃべりするわけでございます。ですから、茶道の方で一期一会って言葉がありますけども、これは非常によく言ったものでございましてね。その場で瞬時にしゃべるといふ、これが結構重要になってくるのであります。普段は寄席というところでおしゃべりさせていただいておりまして、新宿の末広亭さんでおしゃべりをさせていただいています。今日はその高座をお休みしてわざわざこちらの方へ出かけてきたという。(ちょっとマイクの聞こえがあまり良くないようなのでちょっとこちらのに変えてみたいと思いますね。これ入っていますか。大丈夫ですね。こちらの方が聞こえがいいようなので、おしゃべりさせていただいておりますけれど。)

寄席という言葉は実は江戸時代からございまして、人を寄せるというところから寄席という言葉は生まれたんだそうです。ただ最近は、行くのはよせ、という方がいらっしゃいますので、ほんと我々現代の落語家も頑張っておしゃべりをしなくちゃいけないわけですけど、まあその寄席という、寄席に行ったことのある先生方いらっしゃいますか。ちょっと手を上げていただけます。結構いらっしゃいますね。ありがとうございます。落語を聞くの初めてだよ、という先生手を上げていただきたいとおもいます。結構いらっしゃいますね。学校講演というのがあるんですけど、みなさんがた、先生方の高等学校なんかで呼んでいただけることはございましょうか。

私も実は高校時代に学校の体育館で学校寄席というので落語を聞いたのが初めてでございまして、そのとき来ていただいたのが、今、笑点という番組で司会をやっています桂歌丸という師匠。あの髪の毛が1

3本しかない師匠ですけど、あの師匠が「つる」という古典落語をやったのが、確か聞いたのが初めてなんでございますね。学校講演結構多いですよ、月のうち5、6回、私なんかも仕事で行っているんですけど、先だって静岡県の富士宮市というところに行っちゃって、生徒さん方が自分のクラスの椅子を持って体育館までえっちらおっちら運んでくるんですね。シーンと静まりかえってて、ここの生徒さんホントに生きてるのかよって、こちらが心配になっちゃうような生徒さんでございませう。体育館はいりまして、マイク片手に大声で叫んでおりましたら、あれナイキのジャージ着ていましたからたぶん体育の先生でしょ、生活指導ですからね、もう大声で叫んでましたよ。「おい2組曲がってるぞ。望月、杉山、佐野、お前ら静にしろ」。お前が一番静かにしろってね。その後マイク片手に我々が落語家の紹介をしてくださったのが、教育大出たての若い国語科の女の先生でございました。我々芸人の楽屋にお弁当運んでくれたり、お茶を運んでくれたり、お祝儀を、そこまでやりませんですけど。素人さんていうのは時にものすごいことをおっしゃいますよ。「みなさん、今日は東京の方からはるばる落語家の方を4人呼びました。落語というのは江戸時代から四百年の伝統があるそうですよ。みなさん一生懸命おしゃべりになりますので、みなさん決して笑わないように。」笑えというの。ですから今日なんかもホントに出てきたときにはね、先生方こんな顔をして睨んでらっしゃいましたけど、今のように笑えているのは心に余裕のある証拠でございませう。ただ、いま日本人というのは世界からネタにされてきましてね、ジョークの力が足りない、なんてな事を言いますよ。みなさん方もたぶん、いろいろ人前でお話する機会もあると思いますので、こういう事をしゃべったらどうなのかな、笑いとはどうなのかな、結構心を砕いている先生方も多いと思いますけど、やっぱりジョークの力が足りないなんてな事を言われますね。

海を渡りますとアメリカ合衆国、歴代の大統領の中でジョークの上手い人はどなたですかと有識者の方に伺いましたところ、2人名前が上がるんですね。1人は元俳優のドナルド・レーガン。あのレーガン大統領、「ウェール」と言っただけで聴衆は「ウワァー——」っと喜びます。さすが元ハリウッドの俳優でございませう。実はアメリカの大統領にあるジンクスがございまして、ゼロの始まる年に就任した大統領というのは必ず暗殺されるというジンクスがございまして、ご多分に漏れずレーガン大統領も1980年に民主党のカーター大統領を破って大統領に就任したんですが、ジョー・ヒンクリーという狂信者にピストルでバーンと撃たれて、SP、セキュリティポリスが庇いまして、それでも重傷ですよ、瀕死の重傷を負いながらレーガン大統領が自分でこの病院の手術台の上に上って、こうやって上を見渡しますと一と。明かりが煌々とついております。麻酔の先生、執刀の先生、看護師の先生をぐるっと一別してレーガン大統領が言った一言がすごかったですね。「君たちみんな共和党員だろうね。」と言ったっていうね。すごいですね、死の淵にあってもこれだけのジョークが言えるという。これが余裕のある証拠でございませう。

じゃ、もう一方はどなたですかと伺いましたところ、1963年テキサス州のダラスで暗殺されたJ・F・K、ご存知ですねJ・F・K、阪神の勝利の方程式じゃないですよ。ジョン・フィッツジェラルド・ケネディという、ケネディは大変にこの頭の回転の速いレトリックのうまい大統領だったそうでございませう。就任して初めて外遊先に選びましたのはお隣のメキシコ合衆国。メキシコの大統領夫妻とケネディ夫妻が晩餐会、食事の最中にケネディ大統領が傍らにいましたメキシコの大統領がしていた腕時計をほめたんですね。そうしましたらメキシコの大統領が腕時計をとって、「ケネディさん、これあなたに差上げます。」「どうしてですか。」「わが国ではほめてくれた方にほめられたものを差上げる習わしとなっております。」これを聞いたケネディ大統領、傍らの奥さんのジャックリーンの耳元で「今度は君をほめられたら困るな。」と言ったそうです。これくらいのジョークを特に我々日本男児、言えなくてはいけません。

私なんかも、恥ずかしながら家へ帰りますと、ちょっとね、かみさんと、それと秋に3人目が生まれるんですけども大変でございませう。芸人子供ってのはツーパーターンでございまして、ものすごい優秀かものすごい馬鹿かのどちらかでございませう。うちはたぶんこちらにいつちゃうんじゃないかなと、この間もそうでございませう。上の娘が小学校3年で名前が「ゆず」っていうんですけど、ご存知ですか、知らないですよ。これがね、いきなり親に聞いちゃったりします。「ねえねえねえ、おかーさん」、「なーに、ゆずちゃん」、「何でおかーさんはさえない落語家のお父さんなんかと結婚したの」、「それなのよー、よく聞いて

くれた。お前が生まれたからよー」なんてことで子供はぐれてしまいますので、実りある会話をしていただきたいと思いますけどね。やっぱりジョークの力が足りない、ホントにそう思います。ところが日本に帰ってきてどうでしょう。政治家の先生方ちょっと失言が多いですね。最近消費者がやかましいですとか、いろいろと言葉でフォローしているんですが、どんどんと壺にはまってしまう。ま、我々落語家も落語協会所属の落語家も大変に可愛いがっていただいていますのであんまり名前は言いたくないのですが、イニシャルで言いますとね、小泉さんの前の総理大臣がいらっしゃいまして、あまり名前は言いたくないですけどイニシャルで言うと森喜朗というかたがいらっしゃいました。覚えてらっしゃいますでしょうか、小淵さんが亡くなられて沖縄サミット、急遽ピンチヒッター。当時のクリントン、アメリカ大統領に英語でスピーチをしようと血迷ったことを考えちゃったんですね。ご案内の開催表記に「ごきげんいかが」、「How are you?」という英語がございます。「ハウアーユウ？」森喜朗さんはクリントンさんに「ハウアーユウ？」と言うべきところを「Who are you?」と言ってしまいました。英語の先生はおわかりですよ、「あんただれ？」そういわれたクリントンさん、異国のアメリカの大統領はすかさずジョークで切り返しましたよ。「アイム ヒラリーズ ハズバンド」と、「私はヒラリーの夫です。」このジョークには伏線があるんです。クリントンさんが初めてアーカンソー州のボーイスカウト活動で握手をした大統領というのがケネディ大統領、ケネディに憧れて僕も大統領になりたいんだと、このケネディさんが初めてフランスのドゴール大統領に会いに行ったときに、あまりに奥さんのジャックリンの人気がすごいので、私はジャックリンの鞆持ちで来ましてというジョークをドゴールさんに振ったんです。それをちゃんと下地にして「アイム ヒラリーズ ハズバンド」と、「私はヒラリーの夫です。」で、これを言われた森喜朗さん、なんと応えたと思います。「ミートゥー」、「わたしもです。」て、いっちゃいました。知らないということは恐いですねー。言葉のやりとりというのは、みなさんも失敗談というのは多いと思うんですけど。

実は私、お子様を扱う機会も多いんですね。先程にもございました玉井先生の方からね。前座時分には朝吉とっておりました。二つ目の時には朝之助、一応東京の落語会とは大阪の落語会とは違いまして、未だに厳しい身分制度が存在しております。インドのカースト制度ですね。下から、前座見習い、鞆持ち、まだ名前も付けてもらえません。講座返しをしている前座さん、若手、二つ目、真打、御臨終。こういう形になってまして、二つ目時分に、NHK のラジオ第一放送で、山根基世さんというアナウンサーご存知ですか。女性でアナウンス室長務められて、今、円満退職さましてご自分で事務所をつくられました。あの方と一所に土曜ほっとタイムという番組の中で、ラジオ科学子供電話相談室の朝之助おにいちちゃんなんてのを勉強させていただきました。こんなちっちゃい子が科学に関する疑問、あるいはお孫さんに質問されて弱っちゃったおじいちゃん、おばあちゃんが NHK の方に生放送で質問の電話して言ってましたよ。「もしもし、もしもし。」「朝之助おにいちちゃんです。お名前なんていいますか。」「ひとみてついいます。」「ひとみちゃん何年生ですか?」「小学校二年生です。」「ひとみちゃん、今日の質問は何ですか。」「えっとー、どうしてお空から雨が降ってくるんですか。」「あぁいいとこに気がつきましたね。今、先生に聞いてみますから。」「NHK 渋谷区神南放送センター、たかーいビルの13階にラジオ深夜便とかをやっているスタジオがございまして、科学者の先生が5名ほどいらっしゃいまして、先生の言った一言がすごかったですよ「ひとみちゃん、いいところに気がつきましたね。それはね雷様がおしっこしているんですよ。」われわれ落語家でどうしようかという優しい先生ですよ。プラネタリウムの先生から小児科の先生、それから科学の専門家、いろんな先生がいらっしゃいましたけども、放送が終わった後に、山根基世さん大変日本酒がお好きな方でございますので、渋谷のセンター街でいっしょにお酒を酌み交わす機会がございましてね、いろいろお話しをしておりましたら。やっぱりアナウンサーの方というのも失敗談というのが多いそうなんです。女性アナウンサーの誤読と言うんですか、間違った読み方、放送界伝説の誤読に「旧中山道」を「いちにちじゅうやまみち」と読んだというものすごい女性アナウンサーがいらっしゃいます。あえてその方の名誉のために名前は伏せておきますけどイニシャルだけで言うと有賀さつきという、すごいんですね、桜井洋子アナウンサーってご存知でしょうか。今、NHK のエグゼクティブアナウンサー

でございます。あの方が新人当時、明治大学の法学部を出られて、朝7時の全国ニュース。これ大抜擢ですよ、お天気の今日のように夏場いきなり雨がサーッと降ってまいります夕立という言葉がございますね。桜井さん何かウィットに富んだことを言おうと思ったのでしょうか、「朝降った夕立だからこういうのを朝立って言うんでしょうか。」そのあとNHKにじゃんじゃん苦情の電話がかかってきたそうでございます。まあ日本語っていうのはホントに難しいですからね。

みなさん方、先生方でもしくじりの経験というのはあると思うんですけども、それはいろいろ笑いになったりなんかする。これは決して人のことを馬鹿にしてるわけじゃなくて、落語の笑いもそうなんです。第三者から見て、「ああ、俺もそういう失敗をしたっけな。」そこで思わず暖かな笑いがこうクスクスクと生まれてくるといふ。これは落語の懐の広さでございます。興りは戦国時代と言われております。そのころの織田信長公ですとか豊臣秀吉公、家康公の前で洒落を言う存在に御伽衆という。曾呂利新左衛門なんて名前が出てきますが、これが実は我々落語家の御先祖様と言われております。原点が小話と言われておりまして、今日は先生方もせっかく笑いコミュニケーション、人の心を潤すということでございますので、私、2、3お教えしますので是非覚えて帰って、授業で使ってやってみていただきたいなと思います。多分、生徒にめちゃくちゃ馬鹿にされると思いますけど、右向いて左向いて落ちが来るといふ、これが落語の原点です。よく聞いて下さい。「中国の人が骨折したよ、ペキン。」ありがとうございます。大変前向きな笑いなのでもう一発やってみてほしいなと思いますね。「すみません、パン屋さんはどこですか。その角をマーガリン。」大丈夫でしょうか、もう覚えましたか。後で木戸の方でテストしたいなと思いますけれどもね、昔話一つにしてもそうですね。桃太郎、落語でやるとこうなります、ぜひ覚えられますからよく聞いて覚えてみて下さい。「むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に、おばあさんが川で洗濯をしておりますと大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこと流れてきました。おばあさんこの桃を持ち上げると、思わず下っ腹に力が入って、大きなおならを一発、ボンッ。この臭いが山のおじいさんまでとどきまして、おじいさん芝を刈らずにくさかったという。」

わかりましたか、大丈夫ですか、これが意外と出来ないです。と言いますのは、よく聞かれるんです。「落語家さんはどうやって話を覚えるんですか。」って、実は狂言ですとか、我々落語家もそうなんです、台本が無いんです。はい、口伝と申しまして、師匠と口写しの芸なんです。口写しと言ったって、こういう口移しではないですよ。あの、三遍稽古と言いまして、師匠が一日三回同じ話をしてくださいます。師匠は浴衣を着て座布団の上に座りまして、我々弟子は板の間に座りましてね、で、師匠のこの眉間をこう見て、すこーしづつこの話をくぎって、「じゃ、どこまで覚えた。」「はい、ここまで覚えました。」「よし、じゃあやっごらん。」って、こう差し向かいで教わる。そういう世界でございますね、覚えが悪いといきなりこう「カーン」と手が飛んできたりなんかするわけでございます。まあ先生方はね、今、社会が社会でございますのでいきなりこういう事をやると教育委員会なんかで問題になったりなんかして大変かと思いますが、我々の世界は未だに徒弟制度の社会でありますから、覚えが悪いとこういうことは実際あるわけでございます。でもこれはなかなか、あーいいもんだな、人を育てていくシステムが出来ているんだな。

ですから邦楽の世界と違うところは、例えば長唄ですとか、踊りの世界ですとかお茶の世界ですとかお花の世界はお弟子さんから月謝を取って教える。ではこれ、落語家は絶対こういう事はしません。えー、つまりですね、どんなに自分の飯の種であるネタの稽古を下につけても、弟子から月謝を取ったり、小遣いをせびったりとだか、そういうことは絶対にしないわけでございます。自分も上の師匠方からやってきた恩恵をそのまま下へ恩を返していく、これ一つの人を育てるシステムとでも申しましょうか。寄席の楽屋で前座さんというのは大変なんです。私もそうでした。年間365日、毎日毎日いろんな師匠方のこの着物をたたんでね、めくりを返して座布団ひっくり返して、お茶をひっくり返してとうとうそういう生活をしながらやるわけでございます。ただこれもなかなか難しいですよ。マニュアル通りにはいかないんです。いろんなご一門、それから師匠方によって、着物のたたみ方、それから、楽屋に入ってきたときには先ず

冷たい麦茶、着物の着付けをしてからは白湯、降りてからは普通のお茶ですとかね。このお茶の好みも落語協会だけで真打が250人近くいます。その師匠方の好みを全てインプットして瞬時に、臨機応変にこう出来なくちゃいけない。

つまり、理屈よりも体で覚えなさい、こういうことをいろいろ楽屋の方で言われました。親にも言われたことの無いような小言を言われましてね、初めて私も内の師匠、一朝、この近所、小石川一丁目に住んでおりまして。えー、忘れもしません。14年前の8月21日でございます。夜9時半頃、師匠のお宅をピンポンって訪ねていきまして、内の師匠がTシャツにトランクス姿でね、で団扇をパタパタ扇ぎながらガラーと出てきまして、初め私のことを読売新聞の勧誘と思ったらしいんですよ。で、「なーに？」、「すいません、弟子にして下さい。」、「えー、弱ったなー、俺、弟子とらねーんだよ。あんちゃん。」あんちゃんて言葉が堅気っぽくないですけどね。「あんちゃん、とし幾つだ。」、「はい、まもなく24でございます。」、「タイムリミットだなー、うーん、どこ住んでるの。」、「中野の上高田です。」、「あそう、よかったなー、俺、弟子とらねーんだよ、やめな、やめなよ、虐められるし、食べねーから。やめとけやめとけ。」て、いいましたら、台所でカチャカチャカチャカチャ洗い物しておりました女将さんが「だーれー」ってもの凄いの声で叫びまして、「いやなんか弟子にしてくれて来てるんだよ。」、「上がってもらいなさいよ。」女将さんのこの一言でハードル一つ越えまして、で女将さんに大変かわいがっていただきまして、入門かなって、14年前の昨日初めて鞆持ちをしたんですね。鞆持ちをしながら師匠からいろいろ、そのお茶の入れ方、電話の対応の仕方、それから挨拶の仕方、まずいきなり小言言われましたのは、入門行つたときに師匠が玄關でこう座っていらっしゃったんですけど、私は立ったまんま、「すいません。」って挨拶したんです。そしたら師匠がまず一言言いましたのが、「あのなー、相手が座っているのにそのまんま、立ったまんま挨拶とは何事か。」いきなりこう言われました。「どうもすいませんでした。」いきなりその場で正座をいたしまして、「よろしく願いいたします。」こう挨拶をしたことがあります。

ま、こういう理不尽に耐えるとても申しましようか、そういうことも強いられましてね。ただ、今やっぱり我々の世界も現代っ子が増えてまいりましたので、これに耐えられない子はどんどんどんどんやっぱりその、「ああ、嘶家ってのは厳しいんだな。」なんてですぐに辞めちゃう子がいます。やっぱりその入ってすぐ売れるんだぞ、スターになれるんだぞ、これをこう勘違いされている子も結構多ございましてね、やっぱりいろいろ、こう人の痛みですとか、その人の好みですとか、そのなんてんでしょ、体で覚えることで初めてこういういろいろなものが出来てくるという。ですから、今日なんかもそうなんです。えー、今夏休みでお子さんに落語をお教えしているんでございますけれども。先ず言ったのは、「芸は人なり、決して話がうまいだけでなく、その人の人間性だよ、その気持ちになってまずしゃべることだよ。それから、話し上手は聞き上手、人の話をきちんと聞くことの出来ない人は自分の話すときにも聞いてもらえないよ。そのつもりでしっかりお腹から大きな声を出してお話しをなさい。」なんて事を言いますと、子供達もこう目を輝しながら、「ああ、そうかなー」なんて、先程やりました「中国の人が骨折したよ。ペキン」ですとかね、「パン屋さんはどこですか、そこの角をマーガリン」こういった小話から順に順に稽古して、この30日に実は発表会があるんですけども、ちゃんと10分から15分の一席の落語ができるようになります。ああ、すごいもんだな、一生懸命子供ってのはこう覚えているんだな、てのは音でとるのが非常に早いんですね。お子さんというのは、我々大人というのは、どこかこう世間体を気にするところがございしますので、頭でっかちになるところがあるんでございますけど、いやー、子供とこういうふうに接していると、ああいいもんだなーと思ったりいたしますよ。

ただ、やっぱりお子さんの教育って難しいですね。我々一般家庭と違いますのは皇室のご一家でございます。浜尾実さんという元東宮侍従の方がいらっしましてね。あのPHP文庫から躰の本を出されております。あの方が東宮侍従の時分、今の天皇陛下が皇太子時分ですね、赤坂御所でございます。都内の一等地、ご家族でこうやって散策をしておりましたら、ヘビがちょろちょろ、ちょろちょろ、ちょろちょろと出てまいりまして、殿下方ご兄弟、今の浩宮様ですとかね、秋篠宮様、動植物が大好きですから「わー、へびだー」と寄ってきましたら、まあ浜尾さんがなんか事故があっちゃいけないというので「危ない

ですよ。殿下方、ヘビですから下がってください。」って言いしたら。今の天皇陛下が後ろからにっこり笑って「浜尾さん、それはシマヘビという毒のないものです。子供にはなから先入観を与えるのはよくありません。さ、浜尾さんあなたからどうぞ。」って言ったんです。すごいですね、これですよ、みなさん方も、ホントに。

我々の世界もいろんな師匠方がいらっしゃいまして、あの、スパルタの方と、わりと放任の方がいらっしゃいます。うちの師匠、一朝、それから大師匠、先代の柳朝もそうなんですが、どちらかというと放任なんですね。そのかわり、うるさくは言いませんが稽古だけはしろと、一日十分でいいから稽古をしなさいって言いました。稽古をしないと下手になる。話が下手になる。それだけは口をすっぱくして言われましてね。亡くなった大師匠の女将さんにも「ああ、ラーメンの作り方上手くなったってしょうがねーんだ。な一、とにかく話の稽古をしろ。」ってんで、一生懸命こう稽古をしましたけれども。やっぱりこう人を育てるというのは難しいですね。中にはスパルタの方もいらっしゃいましてね。はい、名前は言いませんけど大阪で笑福亭松鶴というえらい師匠がいらっしゃいましてね。うちの大師匠、先代の柳朝とも大変中がようございまして、「わいや、わいや、わいや」なんてんで、あのもう落語家と言うよりあんたヤクザじゃないかなというユニークな師匠がいらっしゃいまして、あの仁鶴さんですとか鶴光さん、鶴瓶さんのお師匠さんで方でございます。

この松鶴師匠の口癖に初対面の方で誰でもかまわず「おまえ、誰や」口癖があって「誰や」というね。この松鶴師匠のお宅で九官鳥を飼っておりまして、九官鳥っていいのは、こんなんでも人のものまねをする鳥、この松鶴師匠の口癖を覚えちゃった。で、あるとき松鶴師匠が寄席の角出で出演をされるというのでお留守にされている。女将さんのあーちゃんも買い物に行かれて、お弟子さん達もそれぞれの稽古で出払っている。で、松鶴師匠というのはお酒の好きな方でございますので、近所の酒屋のご用聞きさんがやってまいりまして、「こんちは、酒屋です。」「だれや」、「あの酒屋です。」「だれや」、「酒屋です。」「だれや」、「さかや・」、「だれや」、「あの、さ・・」、「だれや」、「あの、さ・」、「だれや」もう酒屋のご用聞きさんは九官鳥とは知らずに「さかやです、さかやです、さかやですー」小一時間延々頑張ってたそうでございます。疲れて倒れてしましましてね。そこへ寄席の勤めを終えた松鶴師匠がガラガラガラって玄関を開けて入ってくる。もう普通の人の感覚でしたら「小僧な、どないしたんや」というところを、普段の口癖とは恐ろしいものですね。間髪を入れず「おまえだれや」と言いましてら中で九官鳥が「酒屋です」。これ実話なんですよ。すごいですねー。

ただ、厳しい厳しいと言われていた松鶴師匠も、やはり、意外と、放任な所もあったようでございましてね。あの鶴瓶師匠、まあ今テレビでもおなじみでございます。大銀座落語会でも大変に活躍されています。あの鶴瓶師匠というのは、一席も師匠から教わったことがないんだそうです。すごいですね、何度も何度も「師匠、稽古をつけて下さい。」我々の世界は待っていちゃダメなんですね。つまり、師匠の方から、稽古をつけてあげるよということは一言も言ってくれません。弟子の方から「お願いします、お願いします。」「ダメだ。」「お願い、お願いします。」何度も何度も、「ああ、しょうがねーな一、じゃあ袖で聞いて覚えろ。」とかね、あるいはちゃんと稽古をつけてくれるパターンもありますけど。ご多分に漏れず鶴瓶師匠というのも、先代の松鶴師匠からは一席も稽古を、でもね、一生懸命このステージで、こうやって客席をパーッと、ワーッと盛り上げている鶴瓶師匠の高座を聴いて、タクシーに一所に乗った松鶴師匠が、そのタクシーの室内でポツンと「お前が一番おもしろかったで。」ってこの一言がね、やっぱ鶴瓶師匠はすごい涙が出るほど嬉しかったんだそうでございますね。やはりあんまり言葉というのをポンポンポン言い過ぎててもいけないし、そうかといって寡黙すぎてもいけないですし、その辺の駆け引きとでも申しませうか、やっぱり難しいですね。ええ、先生方もそうだと思うんですけど、我々の世界でもそういうパターンがあります。ですから、その子にあった教育とでも申しませうか。えー我々なんかもそうだと思うんですけども、いろんな難しいところがあったりするわけでございます。

えー、人間国宝で桂米朝という師匠がいらっしゃいましてね。えー、あの師匠なんかも、「師匠にとって落語って何ですか。」と聞きましたら、「そやな、おじいさんが孫に聞かせるお話ですわな。」なんてなこと

を言っていましたけど。あー、これはうまいこと言ったもんだな、落語なんかでもこう聞きながら、ラジオ深夜便なんかでも演芸特選とかやっていますよね。聞きながら「ゲー」と寝られる落語ほどいい落語だとよく言われます。へー、そういう境地に達することができるのかな、で、今ね、こう会場を見渡してみますと、2、3人寝ていらっしゃる方もいらっしゃる、いいんですよ、あの、寝ちゃってもね、思いっきり寝て下さい、普段疲れていらっしゃるから。ただ寝返りだけはうたないでほしいと思いますけども、でも寝られる落語、これ難しいですね。

えー、声もそうなんです。声。お話しをしているときに、声、耳障りのいい声というのが、非常に難しいです。古今亭志ん朝という、えらーい師匠がいらっしゃいました。残念ながら亡くなってしまいました。私も大変にかわいがっていただいたんですけれども、志ん朝師匠なんかも、楽屋でこうお話しをしておりますと、ほんとにこう、心地よい音楽を聴いているような、素敵な声でございましてね。高くもない、低くもない、何となくちょうどいい、こう耳障りのいい声と申しましょうか、ああいいもんだなと思いました。ええそういうまあ普段から寄席の方で我々というのは修行しているわけでございますけれども、まあ今日は立ったまんまで何ではございますから、せっかく一席、落語、聞いてみたいという先生方いらっしゃいますか。ちょっとやってみたいなと思いますけどね。

実は私、趣味が有名人の墓巡りでございましてね。大田区の大森のご近所に池上本門寺という有名なお寺がございまして、いろいろ有名人のお墓があるんですよ。政治家ですとかね、大野伴睦さんですとか河野一郎さんですとか、あるいはこの力道山さんのお墓があったり、それからそうですね、松本白鷗さん、それから市川雷蔵さん、本名、太田さんとおっしゃるんですよ。名刺受けがあるお墓もあったりなんかして、ユニークなんだと思います。ただ最近、みなさん方もいろいろ亡くなったらですね。亡くなったらと言うのもなんですけど、お墓、ユニークな形もおもしろいと思いますよ。最近ゴルフの好きな方は、ゴルフのパターの形をした墓石があると思いきや、おタバコの好きな方はハイライトの形をした墓石があったりなんかするわけでございます。いいもんだなと思いますね。あるいは、代々累代の墓だとか、なにに家の墓だとか、それだけではなくて、故人が好きだった言葉をこうお墓に彫ってみる。いいですねー、先程名前を上げましたケネディ大統領というのは、アーリントン国立墓地、あそこにお参りに行きましたときには、永遠の灯火というのがございましてね。就任演説、ケネディ大統領の、私も高校時代、あれ丸暗記したことがありますけれども、有名な、「アースクノット ホワツチュア カントリー キャンドゥ フォーユー アースクワツチュア キャンドゥ フォーユア カントリー」 国家が何をしてくれるのか問うのではなく、君たちが国のために何が出来るか問いたまえ。ああ、いいもんだな、こういうお墓、素敵だなと思いましたね。もう1人俳優で、ハンフリー・ボガードという、あのトレンチコートの似合う俳優さんがいらっしゃいました。あの方のお墓には何と彫ってあるかということ、「俺に要があるときは口笛を吹いてくれ」、粋ですね。私も死んだらそんな墓に入りたいと思いますね。これを聞いた我々落語会の大先輩で、立川談志というえらーい師匠がいらっしゃいましてね、俺もやるってんですよ。「へー、談志師匠は死んだらお墓に何て書くんですか。」とききましたところ、「俺に要があるときには事務所を通してくれ。」大変でございます。

でも歴史上の人物でもね、やはりこの辞世の句なんてものを残した方多ございまして、有名なところでは、「露と落ち、露と消えにし我が身かな。なにわのことも夢のまた夢」という。これは有名な太閤秀吉、豊臣秀吉の辞世の句であります。さあ、この秀吉が、62歳で大阪城で病でこの世を去ってから、七人衆というのが豊臣家を一生懸命守っておりました。七人衆、一番有名なのが加藤肥後守清正。ね、清正公。この方は一節によりますと、身長が約二メートル、顔の長さが五十センチ、髭の長さが五十センチ、顔と髭を合わせて一メートルあったという。あの三遊亭円楽師匠でさえ「山田君、長い髭、ハハハ」と驚いたくらい恐ろしく長い顔のもちぬしでございましてね。続いて有名なのは天下の横紙破り、いわゆるごり押しと呼ばれました福島左右衛門太夫正典、続いて池田三左右衛門丈輝政、浅野右京太夫吉永、黒田甲斐守長政、加藤左間之介義昭、細川越中守忠興。これにて七人の侍、監督黒澤明。さてこの七人衆と時期天下をねらう徳川家康、これの軍師で本多佐渡守と言う方からお茶の招待状が届きました。豊臣家七人衆に対

抗して徳川は四天王。今申しました本多、松田、豊田、日産、え一、これ車の名前でございますけれど、当時茶の湯というものは戦国大名の間で大流行いたしました。ま、ご案内の千利休という、後に秀吉に切腹を命じられますがこの方が茶の湯として大成して今日まで脈々とその心意気が子孫によって伝わっているわけなんです、さ、この豊臣家七人衆の中でお茶のことをちゃんと理解してますのは、利休の弟子の内1人であります細川越中守忠興、あの細川ガラシャの旦那ただ一人、後の六人、それこそ加藤清正、これは秀吉の親戚の子なんです、尾張中村百姓の出身、小さい頃から織田、豊臣と戦い、戦い、戦い、戦いに明け暮れているもんですから、お茶に関してはもうちんぷんかんぷん。お茶と言ったら、「伊藤園でしょ。」と思っているくらいですから、「細川、困ったことになった。何とかしてくれい。」「いや、何とかしてくれと言われてもな、この茶の湯というものはそう簡単に一朝一夕に教えられるものではない。よわったな。おう、どうじゃ今回は僕の真似をするということで。」「なるほど、そちの真似をすれば良いのじゃな。」真似をするということでとりあえずその場は話は収まった。ところがあの茶の湯というものは大変に奥の深いものなんだそうでした。今日お忙しいなか、こちら都立工芸高校の視聴覚室にお集まりの先生方の中にもひょっとして、茶道部の顧問をされている方もいらっしゃるかと思いますけれども、お茶席におきまして、お詰めという役割があるんだそうですね、お詰め。これ、各列席者、少しずつお抹茶を回し飲みして行って、最後にきれいにのみをして茶碗をほめて、「結構なお手前でした。」スッと下げるという大役、そういう役は俺しかねーだろっていうんで目立ちたがり屋のかっこつけたがり屋の福島正典がやることになった。

ところが、みなさん方にもアドバイス申し上げておきますけども、我々現代人ていうのもあんまし世間的にかっこつけない方がいいですよ。こないだも私、実はあの上野の鈴木演芸寄席終わりました、高座から、楽屋に戻りましたら学生時代の友人が二人、日大の法学部その近所でございますよ。一所にのみに行ったんです。名前は言いたくないですけどチェーン店で加賀屋というやつこだんごのチェーン店がございまして、学生時代を思い出して、中生で「かんぱーい、グビグビグビー」もつ煮込みですとかね、丸いもやしですとか、最後はホッピーでしめるというフルコースを堪能いたしました。で、いよいよお勘定を払う番になりまして、まずA君というやつが「ああ、谷田ね。」僕本名谷田っていうんですけども「おう、谷田ね、今晚俺が誘ったから今晚の勘定俺が払うから。」これを聞いたB君が「かっこつけんじゃねーよ。馬鹿野郎、ちょっとおまえサークルの幹事長やってたからってえはんじゃねーよ。馬鹿野郎、今晚の勘定俺が払う。」「いやーそんなこと言わずに。」「いいからいいから、今晚の勘定俺が払う。」「いや俺が払う。」「いや俺が」、「俺が」、「俺が」、「俺が」、「俺が」、A君とB君が言い合いを始めちゃって、あたくしだまってきたいて「ちょちょちょ、まちなよ2人とも、ほら隣のサラリーマンの人怒ってるじゃないか、いいから、待ちなさいよ狭い店の中で、仮にも俺は芸能人じゃねーかよ。まだあんまり売れてないけど、今日のところはわざわざありがと。今晚の勘定は俺が払う。」と言ったとたんA君とB君が声をそろえて「そうかー、ごちそうさまー」って、詐欺ですよほんとにもう。先生方も俺俺詐欺には気をつけていただきたいなと思いますけど。

さ、お茶席の当日になりますってーと、本多佐渡守が玄関にて丁重にお出迎えをします。「これは御歴々様のお越し、佐渡、有難く御礼をもうしあげます。」これを聞きました細川越中守、こういう茶の会はなれておりますから「佐渡」、「はっ」、「今日は茶の招待をいたしけりかたじけない。ことにそのお出迎え満足じゃ。」「有難き幸せにござりまする。」1人が挨拶をすませたので後の六人黙ってスーッと上がればよかったんですが。何でも真似をしろと言われてるもんですから、加藤清正「ははーん。今のが真似の始まりだな。」と思っちゃったんですな。「佐渡、今日は茶の招待をいたしけりかたじけない。ことにそのお出迎え満足じゃ。」「有難き幸せにござりまする。」続いて池田が「佐渡、今日は茶の招待をいたしけりかたじけない。ことにそのお出迎え満足じゃ。」「あつ有難き幸せにござりまする。」続いて浅野が「佐渡・・・」佐渡守が大変に忙しい、六人が全員同じ挨拶をすませまして、七人目の福島正典、「おうっ、俺はお詰めと言って寄席で言ったらとりをとるようなもんじゃねーかな。みんなと同じ事を言ったら免じがたい。よし、少しばかり言葉を変えてやろう。」よけいなことをしなきゃいいのに「佐渡」、「はっ」、「以下同文」なんだ

かわけがわからない。さあこれから佐渡守の案内で屋敷の中に入りまして廊下を歩いておりますと「なるほど、お茶というものは難しいもんだ。屋敷の中に入れば首をば右に曲げるものとみえる。」よーしっ、てんで一メートルもあろうかというながーい首を思いっきり右へニッと、続いて池田が曲げる、浅野が曲げる、黒田が曲げる、加藤左間之介が曲げる、六人が全員首を右へによっと、しんがり歩いておりました福島正典、なにをしたやがる「ははーん、わかったぞ、屋敷の中へ入ったら首を右に曲げるんだな。おれはお詰めと言ってとりをとるようなもんじゃねーか、みんなと同じ事やったら念じがたい。」よーし、てんでニッと左に曲げたというずいぶんへそ曲がりな人があったもんで、このままの状態で七人がずらっと待合いに並んだ。

さっ、本多佐渡守そういうことは知りませんから、改めてご挨拶を申し上げようと思ひまして「本日はお忙しいところ。」と、こう顔を上げるなり「ブーッ」てふきだしちゃった。お茶席におきまして一番やってはいけない行為は相手のことを笑うことなんですね。そこをブーッと吹き出しちゃった。この様子を見ておりました細川越中守「ん、どうも佐渡の様子がおかしい。さては連中妙なことをしているな。」と横目でちらっと見て、そりゃ笑うはずですよ。みんながみんなこうやって首曲げて座り込んでいるです。しかも1人反対に曲げている奴がいる「何をしておる。清正。わしゃこれ首まがつてんの、古傷、何を考えてるこのうすばかやろう。」っと、思ひましたがなんせお茶席。鹿威しの音が「カコーン」、シーンと静まりかえった静寂の中で、ねー、馬風師匠が前座に小言言う訳じゃないですから大声でうすばかやろうはいけません。仕方がないので体をすこし清正の方へ寄せてまいりますと、首を元に戻せという意味で、清正の脇腹をば、かるーくついた。突かれたのが馬鹿正直の加藤きよ「なるほどお茶というのは難しいもんだ。待合いに座れば隣の脇腹を突いてもまわるもんだ。」よーしってんで馬鹿力でもって池田輝政の脇腹をゴーン、突かれた池田が浅野をゴーン、浅野が黒田をゴーン、黒田が加藤左間之介をゴーン、加藤左間之介は思いっきり力を入れて福島正典の脇腹をゴッ「ブー、いてーなこの野郎、冗談じゃねー、俺も負けずに、あ、だれもいなーい。」仕方がないのでダンスにゴーン。がんばってついてきてくださいね。まだお話しは続きますよ。

ジャンジャンジャンジャンジャン。これはお茶席の用意が出来ましたという鳴物、晩鐘のしらせ。さ、本多佐渡守、心静かに、お茶をたてますってーと「どうぞ。」と一番偉いお客様である細川越中守に差出す。細川忠興というのは利休七哲の1人といわれるもう優れた茶人でございます。今子孫はいらっしゃいますね。元、日本新党こしらえて、細川さん、朝日新聞のある学芸記者が細川さんと対談をしているときに、あの白須雅子さんにも大変にかわいがられた細川さんでございます。「いや、細川家はいいですね。いろんな茶道具ですとか美術品、骨董品があつて、うらやましいですね。」といいましたら、細川さんがにこり笑って「いやいや、そんなことありません。我が家も先だつての家事で大分品が焼けてしまひまして。」「細川さん家が火事、それはいつのことです。」「へえ、応仁の乱です。」って、全然スケールが違うわけでございます。そういわれる御先祖様細川忠興、これ見よとばかりに一口召し上がってどうぞと隣に回す。さあ、問題の加藤清正君でございます。生まれて初めてお茶というものにご対面。加藤茶というくらいで、「さいぜんからやりそこのうてばかり、ここはビシッと決めて皆に手本を示さねばならん。」と思ひましたが緊張しておりますから、手がガタガタガタガタ震えている。ヨウヨウの事で茶碗を持ち上げてまいりますと、お抹茶、これ濃茶ですからどろっとしてます。飲もうと思つて茶碗中をのぞく「あー」とおどろいた。なんと茶碗中が髭で埋まっていたという。清正くん髭だけで五十センチほどもあります。下から持ち上げてくると必然的に髭の先がお抹茶の中にズブズブズブ。ここでストップモーションです。まだおわかりにないなっていない先生方に、軽くワンポイントゼミナールとしてご説明申し上げますと、ちょうどみそ汁の中にとろろ昆布が浮いているというあの感じ。加藤清正公「またやりぞこのうた。ああ、またやりぞこのうた。」仕方がないので茶碗をスーッと下に降ろし、何を考へましたか二本の指でもって自慢の髭を「ジュウー」っと絞り降ろした。さあこれを隣で見えておりました池田輝政の目が点になった。

「あー、清正、こやつ茶で髭の洗濯をしよつた。俺は潔癖性でただでさえ人ののみこぼしを飲みたくないかない、清正の髭入りなんてやだー」嫌だ嫌だと思ひましたがまわつてまいり「トホホー、清正の

髭汁が、髭の油が浮いておる。清正髭の手入れが悪いからな。」嫌だ嫌だと思いましたが男ってのはやっぱり世間体がきになります。意を決して一口ゴブリとやってみたんですが、あの、これお薄、薄茶とちがいまして濃茶。飲んだことあります。私も裏千家のお稽古でやってみたんですけど。ドロツとしておりましてね、苦いやら甘いやらしかも清正君の髭汁のエキスがたっぷりと含まれておりますので、一口ゴクリとやったところで思わず胸の奥からこみ上げてくるものがありますと思わず茶碗の中へ「プー」さあこれを隣で見ていた浅野右京太夫の目がさらに点になった。「アアー、輝政、こやつ茶でうがいをしよる。さらにそのうがいを茶碗の中へほうりだしやがった嫌じゃあ」、「どうぞお飲みを」、「誰が飲めるかいこんなもん、あー、あーお茶を汚しやがってやだなーほんとに、あ、いいこと考えた飲んだふりして隣に回しちまおう。」浅野が飲んだふりをする。黒田が飲んだふりをする。加藤左間之介が飲んだふりをする。トントントントンとお詰めであります福島正典君の今日の前に来て、「何だよこれはおい、全然減ってねーじゃねーかよ。」かえって増えているくらいですから、「こんなもん隣にまわ・・・、だれもいなーい、弱ったな俺はお詰めと言ってこれをきれいに飲み干して茶碗を置いて下げる役、えーいだめだ、福島左右衛門太夫正典が茶の飲み残しなんてまねが出来るか、佐藤、菓子鉢をくれ。」しばらくは菓子鉢を見ながらお菓子をじーっと眺めていたが意を決して手で掴むって一口の中に放り込んで茶碗を取り上げて一気に「クッククッククッククッククッガ、ガコ。うーまずいもう一杯。」青汁みたいな事を言いましてね。ゲラゲラゲラゲラ正典は大声で笑い出した。これを見ていて自己責任を感じた加藤清正、「まさのりー、儂がへまをしたばかりに、おぬし茶を飲んでどうにかなっちまったのか。」、「いいやーおかしくって笑った。」

ちょっと尾籠な話で恐れ入りましたけどね、こういった話もございましてやはり歴史上の人物って面白いですね、やっぱり私も昔から、小中高と通して社会科だけはですねー、ずーっと5だったんです。これだけはね自慢でございましてね。算数とか理科が2とかいうときでも社会科だけは5だったんでございましてね。ちょっと変わった子供でしたからね、歴代天皇 124 代すべて丸暗記するですとか、そんな変なことばかりやってまして、「お前は変わった子だなー」なんて親から言われたこともありましたが、人間どっかね見所があれば私のような雑草でも生きていけるといふ、それが見本であります。

先生方もこれからの世代を育てていく、ほんとに先生という仕事は大変な仕事だと思っておりますので、これからはお体に気をつけて頑張っていただきたいと思いますと思っております。今日はせっかくですので何か質問とかありますか。大丈夫ですか、年収幾らくらいとかそういう質問はやめていただきたいなと思

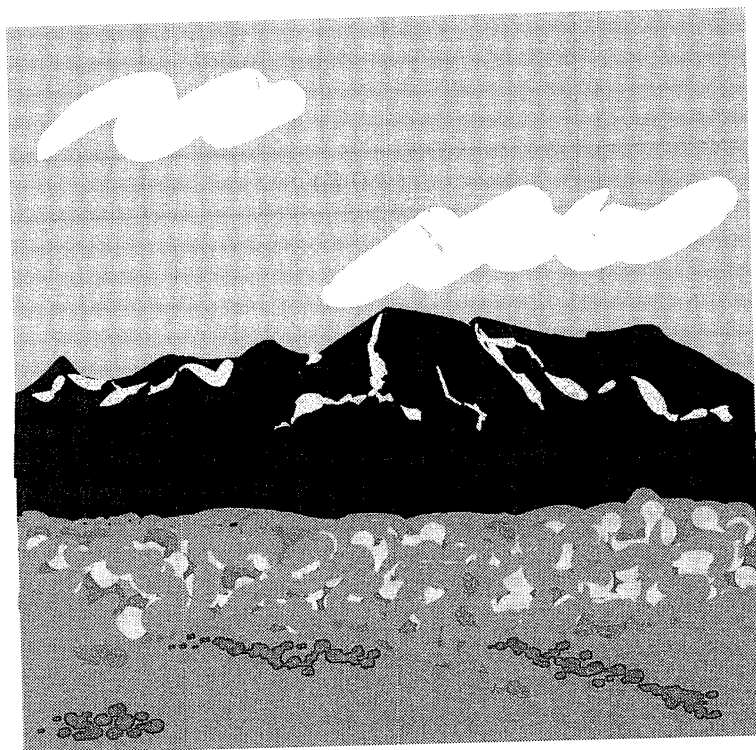
います。はい、また機会がありましたら是非お声をかけていただきたいなと思っております。先生方、今日はお忙しいなかほんとにどうもありがとうございました。みなさん疲れ切っておりますね、でもホント先生方がいないとこれからが大変だと思いますので、あの、多分ほんと私も思ったんですけど、好きな先生がいるとその授業は絶対楽しくなると思っておりますので、これからは子供達のために是非頑張っていただきたいと思いますと思っております。はい、何もないかな。はい、ありがとうございました。



師匠〈右から 3 人目〉と副校長会役員

(文責 事務局)

参加者名簿



委員会別参加者名簿（全日制課程） 92名

管理運営研究部					高校教育		
第一委員会			第二委員会		第一委員会		
氏 名		校 名	氏 名	校 名	氏 名		校 名
小宮山 東田 神小野 磯安栗 小都 浅下 橋笹 青平 新櫛 宮佐	英保亮 卓幸淑 隆のぶ 義治 義芳	明二浩篤郎一訓功弘史昇え修博雄和弘教 松芦富豊杉三狛大雪田駒目都千深第世 園調布場黒丘沢商合工 原花士玉並鷹江崎谷布場黒丘沢商合工 中佐上大金石板今有齋	村藤原島子坂倉澤明藤 彰彰徹良勉子哲夫人弘 洋敦秀得義 王鷺武大練大杉練練農	子蔵 泉並馬馬 工宮丘泉馬桜工工芸	山藤野場井野川田田下津 中佐上馬石梶古前柴山長 辻村藤澤崎賀 志佐黒長須	善和勝 末茂直達 平信修 敏秀	弘彦敏寿勝雄浩見誠肇二宏司修明正次 町野小山町若若片八松南八北調府国農 津田総総子桑多布中 田田川崎工合合倉東谷平志摩南西立業
(19名)			(10名)		(17名)		

研究部			生徒指導研究部									
第二委員会			第一委員会			第二委員会						
氏 名		校 名	氏 名		校 名	氏 名		校 名				
山本 林真 三宅 樋口 藤川 昼井 仁島 飯島 八百 八板 藤原 幸田 富川 滝澤 内田 高橋 高松 高橋 中田	正二 次郎 文一 雄春 正二 弓憲 昭子 史勲 雄清 進彦	足立 江青 葛南 葛南 葛農 赤竹 向小 小工 広市 忍荒 蔵蔵	立北 井野 飾商 合産 坂早 丘川 等芸 尾商 岡商 工	三保 荒川 鈴木 永森 遠山 白井 清藤 加田 岡水 清輪 美野 高橋 太田 高橋 佐々 木	和彦 春人 比美 孝典 克昌 ゆか り隆 吾薫 武信 幸一 進哲 雅充 公	八大 蒲田 両本 深城 小小 篠篠 紅紅 江江 第第 葛葛 科科 学学 技技 術術	潮森 田無 国所 川東 川岩 崎川 商商 工工 術術	錦織 佐々 保木 矢坂 淵作 渡脇 下邊 早田 興山水 熊谷 長島 岩坪 西塚	政雅 充俊 英博 賢義 美智 通良 光春	晴人 人郎 一史 明郎 子眞 夫夫 吉吉 義義	武蔵 武蔵 東久 留米 拝大 東蔵 武大 多福 福羽 瑞穂 小穂 平	蔵北 野中 附屬 米総 大村 和和 南南 摩生 村芸 南南
(19名)			(16名)			(13名)						

委員会別参加者名簿（定通制課程） 65名

東部地区委員会				
氏 名	校 名	氏 名	校 名	
宮崎 祐一 福石 智典 菅 博 菅 篤 阿 登 大 博 鍋 正 太 憲 鹿 秀 相 伸 小 眞 稲 良 難 芳 諏 英 神 義 山 健 吉 毅 雨 利 栗 毅 高 利 関 毅 浦 利	立北工業 商業橋吹 工業吹吹 芸野草業 業業業業 業業業業 森国川川 岩南戸戸	村山井藤 司 中 奈 内 庄	茂繁潔雄也 公一	商業工業 商業工業 島三島田 橘 向第向墨
(27名)				

中部地区委員会				西部地区委員会							
氏 名		校 名		氏 名		校 名		氏 名		校 名	
高木	亀介	松原	窪並	平野	みどり	町富	田森	東山	伸一	幸郎	東久留米総合
原西	英正	荻杉	鷹代	小川	芳雅	八王	士子	大福	昌一	明佳	小青梅総
渡植	利吉	三神	大崎				工業				井工
金前	俊徳	大雪	谷宿								業合
真須	昭宗	桜世	町業								林
清大	康芳	園子	芸業								
高横	哲康	王北	工業								
堀松		石神	井業								
山		第四	商業								
		中野	業芸								
		農									
(17名)				(8名)							

東京都立高等学校副校長研究協議会参加者数の変遷

(過去3年間)

日 時 平成18年9月29日(金) 立川多摩教育センター(立川)
 平成19年8月31日(金) 教職員研修センター(水道橋)
 平成20年8月28日(木) 教職員研修センター(水道橋)

	18年度	19年度	20年度
参加者(全)			
管理運営研究	25名	25名	29名
高校教育研究	32名	37名	36名
生徒指導研究	28名	30名	29名
合 計	85名	92名	94名
参加者(定)	第1委員会 22名 第2委員会 11名 第3委員会 16名 第4委員会 14名	東部委員会 31名 中部委員会 22名 西部委員会 12名	東部委員会 27名 中部委員会 17名 西部委員会 8名
合 計	63名	65名	52名

参加者内訳(全)

	18年度	19年度	20年度
管理運営研究			
第1委員会	10名	12名	16名
第2委員会	15名	13名	13名
高校教育研究			
第1委員会	23名	25名	17名
第2委員会	9名	12名	19名
生徒指導研究			
第1委員会	14名	10名	19名
第2委員会	14名	20名	10名

全日制・定通制高等学校教頭会・副校長会 研究協議会の歩み

昭和 45 年度	本研究協議会 第 1 回開催 於、箱根（1泊2日）	⇔	大学・高校紛争
46 年度	当日は「発表要旨」、事後に「研究集録」を発行。 (教育庁指導部編集)		
48 年度	全日制教頭会 研究部会を設置（規約改正）。 教育庁より教育研究団体会費を受け、「研究集録」を創刊、 現在に至る。	⇔	オイルショック
51 年度	研究協議会 都立教育研究所にて 2 日間の日程に変更。	⇔	都 緊縮財政政策
58 年度	教育庁指導部編「発表要旨」・「研究集録」の発行は取りやめ。 定通教頭会 「教頭発表資料」創刊、現在に至る。	⇔	都 緊縮財政政策
60 年度	全定教頭会合同「研究協議会報告」創刊。 平成 11 年度第 15 号を発行。		
平成 4 年度	研究協議会日程 1 日のみに変更。	⇔	都立高校改革
11 年度	同 日程 半日に変更。		
12 年度	主催が教育庁から全・定教頭会に変更。ただし、開催にあたっては、 教育庁から様々なご指導を頂きつつ、従来の運営方針を維持する。	⇔	都 緊縮財政政策
13 年度	参加形態が「出張」から「職免」扱へ変更。		
15 年度	参加形態が「出張」へと戻った。		
16 年度	副校長研究協議会と名称変更。		
17 年度	これまでの 9 月実施より 8 月実施へ変更。		
18 年度	会場の都合により 9 月実施へ変更。		
19 年度	17 年度と同じ 8 月実施。		
20 年度	8 月実施。	⇔	経 済 危 機

(平成 20 年事務局 調)

年度	発 表 資 料			報 告 書	
	都教委編 全定合同	(全) 教頭会・副校長会編	(定) 教頭会・副校長会編	都教委編 全定合同	(全・定) 教頭会・副校長会編
昭 45					
46	高等学校生徒指導研 究協議会 発表要旨 33 p			高等学校生徒指導研 究協議会研究集録 40 p	
47	高等学校教頭・主事 研究協議会 発表要旨 49 p			同上 40 p	
48	同上 67 p	研究集録 創刊号 43 p			
49	高等学校教頭・主事 研究協議会 提案要旨 32 p			高等学校教頭・主事 生徒指導研究協議会 研究集録 48 p	
50	高等学校教頭研究協 議会 提案要旨 28 p	第 2 号 72 p		高等学校教頭 研究協議会 研究集録 44 p	

51		第3号 75p		同上 54p	
:		:		:	
58		第10号 66p	高等学校教頭研究協議会 教頭発表資料 p		
59		第11号 67p	同上 p		
60		第12号 77p	同上 p		東京都立高等学校教頭研究協議会 研究協議会報告 創刊号 54p
61		第13号 74p	同上 p		第2号 59p
:		:	:	:	:
:		:	:	:	:
15		第30号 44p	同上 p		第19号 47p
16	高等学校副校長研究協議会に名称変更	第31号 34p	高等学校副校長研究協議会発表資料	高等学校副校長研究協議会に名称変更	第20号 51p
平17		第32号 34p			第21号 55p
平18		第33号 66p (全・定合併号)		第22号 76p (全・定合併号)	
平19		第34号 48p (全・定合併号)		第23号 76p (全・定合併号)	
平20		第35号 48p (全・定合併号)		第24号 60p (全・定合併号)	

編集後記

夏季休業も終わりに近くなった8月28日(木)、教職員研修センター及び都立工芸高等学校を会場として平成20年度の都立高等学校副校長研究協議会が開催されました。そこでの研究成果を今回「研究協議会報告」第24号として発行するにあたり、研究を推進した関係者の方々のご努力とその成果に対し、深く敬意を表すとともに感謝申し上げます。

昨年度と同様、今年度も全日制課程と定時制課程が協力して合わせて4分科会で実施されました。発表内容はいずれも、現在どの学校でも課題になっているテーマが取り上げられており質疑や討論がどの分科会でも活発に行われました。この成果を、研究協議会報告として1冊にまとめることができました。ぜひこれを活用し、都立高等学校の課題解決に役立てていただければ幸いです。

年々多忙化が増す副校長業務の中、研究を進めることはなかなか大変ではありますが、大変だからこそ副校長同士で課題解決のために共に考え協力していくことがますます重要になってくると思います。東京都の副校長会が元気で、全国の高等学校教育の進展に役立つ情報発信ができるよう今後とも努力を積み重ねていくことが必要と考えます。今後の研究を進めていくにあたって、各支部ごとに活発な意見交換をし、よりニーズにあった実践的な研究を目指していくよう今後ともご協力をお願いします。

なお、今年度の「研究協議会報告」の発行にあたり、教育庁指導部高等学校教育指導課及び校長協会の先生方にご指導、ご助言を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

東京都立高等学校副校長会 副会長
東京都立雪谷高等学校 副校長 都築 功